

続縄文文化の資源・土地利用

隣接諸文化との比較にもとづく展望

Use of Resources and Land in the Epi-Jomon Culture : Perspectives Based on the Comparative Study with Adjacent Cultures

高瀬克範

TAKASE Katsunori

はじめに

- ① 近年の研究動向と課題
- ② 続縄文文化の生業
- ③ 続縄文文化の交換
- ④ 本州島東北部との関係

おわりに

【論文要旨】

続縄文概念の有効性の評価にあたり、隣接諸文化との比較からその異同性をさぐることは重要な手段となりえる。本稿では、資源・土地利用を中心とした経済の観点から縄文・弥生および一部古墳文化との比較をおこない、以下の点を指摘した。

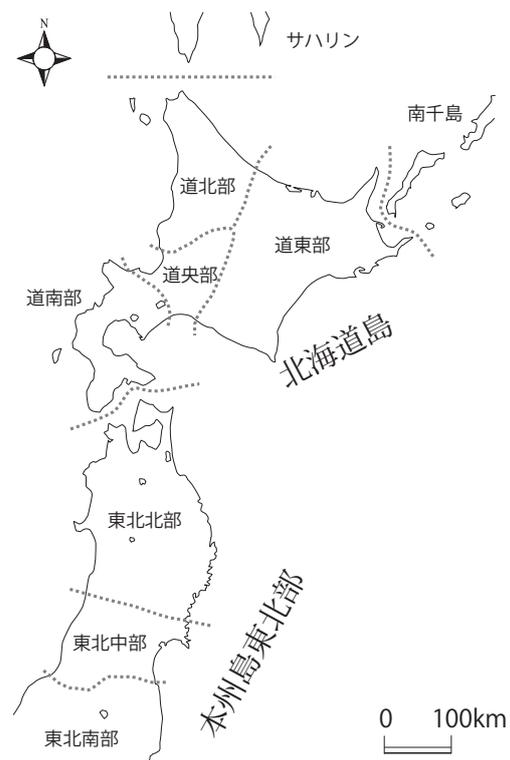
- 1) 続縄文文化前半期には、道南部・道中部・道東部においてそれぞれ独自の方式で資源開発が行われたが、縄文文化期よりも魚類の重要性が高まる点ではすべての地域が共通している。
- 2) 道中部は続縄文文化期前半から外来系の物資入手力が相対的に高かったと推定され、そのネットワークとサケ科の利用を基軸とした経済が、後半期の道中部の優位性にも関係する可能性がある。
- 3) 続縄文文化後半の焼土遺構のなかには、居住施設が含まれている。移動性の高さについては明確な結論をすぐに出すことはできないものの、居住施設の簡便性にくわえて土器の広域分布、石器の段階的減少、重量ベースでサケが中心となる遺存体、偶像を埋め込んだ儀礼の場としての洞窟遺跡の発達などからみて、少なくとも一部には広域に移動して物資を運搬する集団が含まれていたと考えられる。
- 4) 東北北部の弥生文化は平野部で稲作を積極的に行うA地域と、平野部以外で狩猟採集に重きをおく生業を展開したB地域が複合して地域社会を形成する。このうち、続縄文文化が直接的に関係を有していた可能性が高いのは、B地域である。
- 5) 東北北部の弥生文化は中期中葉に生じた自然災害により稲作が中断し、A・B地域複合の崩壊、人口激減がみられる。この点が、弥生中期中葉の続縄文文化の分布域拡大とも間接的にむすびついている。
- 6) 後北C₂-D～北大式期の東北北部は、文化境界(帯)や文化遷移帯ではなく、異なる考古学的文化の雑居地帯(Mixed residential area, Mixed residential quarter)としてとらえ直す必要がある。これらの特色はいずれも縄文文化にはみられなかったもので、現時点で続縄文文化の括りには一定の妥当性を認めうる。

【キーワード】 続縄文文化, 弥生文化, 生業, 資源利用, 交換

はじめに

本稿の目的は、続縄文文化期の人々の行為をおもに資源・土地利用の観点から縄文・弥生、一部古墳文化期と比較することで、その特色を浮き彫りにすることにある。続縄文文化と隣接諸文化との関係について仮説的ではあるが整理することで、将来的におこなわれるであろう続縄文概念の有効性の評価に資する理解を提示することができるからである。あわせて、居住形態や考古学的文化の区分問題など依然として説明が難しい問題については、いくつかの新しい観点から検証すべき論点を提示し、今後の仮説検証の道標をしめすこととしたい。

なお、本稿では第1図にしめす便宜的な地域区分にしたがって記述をすすめる。北海道島は石狩低地帯を中心とする「道央部」、渡島半島を中心とする「道南部」、上川・宗谷管内を中心とする「道北部」、それ以外の東部を中心とする地域である「道東部」に分ける。このほか、「サハリン」と「南千島」も本稿に関係する。本州島東北部は、青森・岩手・秋田県域がふくまれる「東北北部」、宮城・山形県域がふくまれる「東北中部」、福島県域がふくまれる「東北南部」の3つに区分した。



第1図 本稿における地域区分

①……………近年の研究動向と課題

(1) 時代と文化

本題にはいるまえに、考古学的な時代概念と文化概念について整理する。というのも、対象地域・時期においては時代と文化の混用が珍しくなく、くわえて「弥生時代」や「弥生文化」の認定にあたって同じ土俵で生産的な議論をおこなうための前提が共有されていない懸念があるからである。

現在、北海道島の考古学では、「旧石器時代」や「縄文時代」といった時代名称が一般的に用いられており、これらは「旧石器文化」や「縄文文化」という文化名称ともきわめて高い互換性がある。そのいっぽう、「オホーツク文化」や「アイヌ文化」が「オホーツク時代」や「アイヌ時代」と呼ばれることは、ごく一部の例外〔横山1985など〕をのぞいてない。この結果、ひとつの編年表や年表のなかで、文化と時代が混在することが常態化している。

物質文化をとりあつかう考古学的な分析の手続きにおいては、考古学的な文化区分が時代区分に優先し、その逆は成り立たない。そして、考古学的文化が設定されたとしても、必ずしも時代と互換性があるわけではない。なぜなら、特定の時代区分が適用できる範囲は、文化間をまたがる何らかの「同一性」、たとえば住人の系統・政治体制・言語・社会組織・生産体制など物質文化そのものとは異なる次元の文化的側面や歴史的意義が見いだされた空間だからである。したがって、たとえば「縄文時代」と「縄文文化」のように、時代と文化がほぼ何の制約もなく相互に互換性のある概念として用いられている状況こそ例外的なのであり、それは「縄文文化」の設定方法が変則的であるか、「縄文時代」が適用できる空間範囲にかなり強固な「同一性」があらかじめ認められているか、あるいはこれらが複合しているからにほかならない。

この点は学史の検討からも論じられてきているのでこれ以上は踏み込まないが〔大塚 1996 など〕、ここでは個別の物質資料により即している概念は時代ではなく、考古学的文化であることを確認しておきたい。本稿では、こうした手続き上の問題とともに物質文化複合の類型の概念としても文化がよりふさわしいタームであると考え、文化に統一することとする。

筆者はこれまで、時間的な側面を強調した時代概念を優先させ、文化を使用する場合はカギ括弧付きで使用することが多かった。こうすることで、文化人類学などでいう文化概念との混乱を回避し、空間の優位性が自明視されてきた国民国家の枠組みを相対視させる効果が期待できると考えたからである。しかしながら、本来は「共存諸型式の常時的組合せ」〔チャイルド 1956〕によって設定される文化のほうが、空間・時間に関しては時代よりもはるかに中立的なはずである。なぜなら、時代概念はあらかじめ時代区分が適用できる範囲をできるだけ簡潔に定めてしまう傾向にあるが、文化区分はその複雑な広がりや存続時期をより忠実にとらえることができる可能性を潜在的に有しているからである。にもかかわらず時代概念に固執しつづければ、その時代区分を適用できる空間区分が妥当であるという認識を支える「同一性」をこれからも再生産・固定することになってしまう。その「同一性」は、もともとは研究を遂行する便宜のために仮設されたものにすぎず、分布論や型式論などの方法論によって検証されなければならない課題でもあるのだが、時代概念の使用がそれを課題として直視することを妨げている。こうした理由からも本稿では、時代は用いず⁽³⁾に考古学的文化を用いる。

(2) 文化概念の階層性

文化概念を優先させる場合、日本考古学で用いられている文化と世界標準の考古学的文化の相違について特段の配慮が必要となる。縄文文化や弥生文化は世界標準でいうところの考古学的文化（「共存諸型式の常時的組合せ」）ではなく、それらをいくつも集めた「考古学的大文化」とでもいうべきものだからである。日本列島北部の考古学をシステム論的な観点から再構築することはここでの目的ではないが、文化概念の整理のうえで資する部分があると考えられるため、ここで D. Clarke [1968] の議論を参照してみたい。

Clarke は、G. Childe の方法論に依拠しつつ、考古資料の階層性を下位から属性 (attribute) — 人工物 (artifact) — 型式 (type) — アセンブリッジ (assemblage) — 文化 (culture) — 文化グループ (culture group) — テクノコンプレックス (technocomplex) と整理している。たとえば、ヨーロッパ新石器

時代においては、ダニューブI、西部ステップ、TRB北部などが具体的な文化グループであり、おのおの文化グループには複数の考古学的文化が包摂される。

文化グループの上位に位置するテクノコンプレックスは、文化グループ・文化・アセンブリッジ・人工物型式を結びつける巨大なシステムである。「多相配合を共有するアセンブリッジによって特徴づけられる文化群の集合で、環境・経済・技術の共通要素に対する広域かつ連動した反応が共有されているもの」と定義される⁽⁴⁾。具体例としてアシュリアン、ムステリアン、オーリニャシアン、パレオインディアン、極北小型石器などのテクノコンプレックスがあげられており、従来、文化群(cultures)、文化グループ(culture group)、伝統(tradition)、相(phase)、ホライズン(horizon)とよばれてきたものにおおむね相当するものの、概念的には同じではないという。とくに、アメリカ大陸で広く用いられている伝統(tradition)の概念は、その汎用性ゆえにさまざまなものが含まれてしまうため、テクノコンプレックスとの安易な対比は危険である[Clarke 1968, p.333]。また、人類史的な時代区分(Paleolithic, Neolithicなど)や単なる狩猟・漁労・採集民、遊牧民などの区分とテクノコンプレックスは、やはり同じではない[ibid., p.329]。

縄文文化は、広くみれば完新世の狩猟採集民がのこした文化であり、この意味では日本列島以外と日本列島をわける明確な根拠はない。しかし、土器型式に代表されるように、空間的にも時間的にも多相配合的な要素が共有されている部分が多いことはこれまでの指摘のとおりであろうし、環境・経済・技術への反応の連動性という意味でも、縄文文化は少なくとも文化グループよりも上位のテクノコンプレックスかそれ以上のレベルのまとまりと考えることができる。

だがそれは、縄文のなかの文化グループ(culture group)(当然ながら、岡本勇[1959]による型式群や、小林達雄[1977, 1989]による様式概念は文化グループと同じではない)の確定や、環境・経済・技術に対する反応の共有範囲を時期ごとに確定する作業を後回しにした「予想」にとどまっていることを忘れてはならない。テクノコンプレックス以上のレベルにおけるゆるやかなまとまりとしての縄文文化の範囲は、現在、妥当な範囲を時期ごとに見いだしていく分布論的な検証作業に本格的に取り組む段階にさしかかっている⁽⁵⁾。

弥生文化は、水稲耕作に関係する型式群がしめすように環境・経済・技術への反応という点で縄文文化とは重大な違いがある。かつ、物質文化が多相配合を共有するアセンブリッジによって特徴づけられる点で(この場合、金属器や環濠集落は必ずしも弥生文化すべてにみられなくともよい)、縄文文化との系統的關係の強弱があっても問題はない。弥生文化もまた、内部に複数の考古学的文化および文化グループをふくむテクノコンプレックス以上の考古学的なまとまりとすることができる。稲作を指標として縄文と弥生を区分する際はテクノコンプレックス以上の水準における区分であり、より多くの指標によって弥生文化内部の細分を行おうとする立場は、文化グループ以下の水準における区分である。だとすると、両者の論争がかみあわないのはむしろ当然かもしれない、区分しようとしている archaeological entity のレベルを明確にしないと生産的な議論ができないのではなかろうか。

このように考えると、かつて森田[1968]が続縄文文化の内部を恵山文化、チブスケ文化、江別文化などに整理したのは方向性としては妥当であった。ここでは、続縄文というまとまりが文化グループなのか、テクノコンプレックスなのか、あるいはそれ以外の概念でとらえるべきかについて

拙速に結論をだしてしまうことはしないが、その単位は少なくとも複数の考古学的文化を包摂する文化グループ以上の水準に相当する点は確認しておきたい。

(3) 続縄文文化研究の問題点

したがって、続縄文文化と隣接諸文化の区分に関する議論は、考古学的文化よりもさらに抽象化された領域に属する。そこで重要なのは、たとえば文化グループやテクノコンプレックスなどとしてまとめ上げるだけの十分な根拠があるかどうかである。しかし、実際には先行して実施された土器の区分にもとづく枠組みから極めて大きな影響をうけているため、とりわけテクノコンプレックス以上の議論にとって有効な判断材料はまだほとんどないのが実情であろう。一見、枠組みに関する明快なアイデアが出されていると思える場合であっても、概論的・概述的な場で触れられているケースがほとんどで明確な根拠が伴わない感覚的な発言に終始している。これが、続縄文文化研究の第一の問題点である。

たとえば、続縄文を縄文文化最終段階の大別型式、あるいは文化グループに位置づける見解が、続縄文や縄文それぞれの特徴やどのような共通点・差異があるのかを詳述しないまま結論だけがブックレットや教科書で述べられてきている [工藤 1989, 小杉 2011b など]。また、「山内の書いたものを読むかぎり、彼自身は「続縄紋式」は文字通り「縄紋式」の「続き」であり、全国に分布する早～晩期縄紋式の5大別にくわえて北海道だけに6つ目の大別がある、と考えていたと思うのですが、いつの間にやら北海道では縄文時代の後に「続縄文時代」が来ることになってしまいました」 [西脇 2010, p.183] と、縄文と続縄文の同質性を学史の検討から補おうとする試みもある⁽⁶⁾。だが、土器の区分と不可分に結びついていた山内 [1939 など] の考えを改めて詮索しても、学史研究としての重要性をこえて、テクノコンプレックス以上の水準における縄文・続縄文の区分問題にとって有効な手がかりがえられるかどうかには疑問がのこる⁽⁷⁾。

石器の検討からも、縄文と続縄文の連続性が説かれているが、経済の研究が欠落しているため同様の問題を克服するまでにはいたっていない。高倉 [2011] は、縄文早期以降の北海道島では、大・中型動物の狩猟・解体の活発化など一定の条件のもとでは系統的なつながりがなくとも両面調整石器が繰り返し現れ、続縄文の両面調整石器もその反復のひとつとみる。この種の石器が機能・用途面で特定の資源、とりわけサケ・マス利用にむすびついているという想定もなされてきただけに [木村 1976]、続縄文概念の有効性にも関係する見解である。

だが、縄文文化期の北海道島における両面調整石器は石鎌・尖頭器が支配的で、切裁具は限定的である。一方、続縄文文化の両面調整石器には石鎌はあるが尖頭器はほとんどなく、切裁具 (スクレイパー類) が圧倒的に多い。切裁具は動物のみならず植物にも積極的に使用されており、動物の狩猟・解体の活発化とつねに結びつくわけではない。さらに動物質資源と関わるといっても、後述のように縄文ではおもに哺乳類、続縄文ではおもに魚類との関係が考えられ、両面調整石器出現の背景については大きく異なる可能性がある。テクノコンプレックスの水準の区分ではこの点がじつに重要な意味を帯びてくるのであるが、単純な石器製作技術の問題をこえてそこまでが射程に収められた研究へと発展していくのかどうかは現時点では不明である。

これに対して、続縄文を縄文とはべつの考古学的文化としてあつかい、その独自性を積極的に評

価値する立場は、1970年代から現在にいたるまで主流をなしている[沢1974, 藤本1979, 1988, 2009など]。そこでは、続縄文における漁労や交易の活発化が注目されてきたが、やはりいずれも概説書かそれに準じる場での発言であり、縄文との比較からこの点を具体的に検証している研究はないといつてよい。したがって、続縄文を縄文の一部にふくめる立場、縄文とは切り離してとらえる立場、どちらの立場もまだ続縄文の特色や縄文との関係を経済のデータを通して具体的には描き出していないのである⁽⁸⁾。将来的にはこうしたデータこそが続縄文概念の有効性を検証するために不可欠になることは間違いないが、それが依然としてない点を第1の問題点としてここで指摘しておきたい。

第2の問題は、続縄文文化内で生じた変化のダイナミクスに関する理解がほとんど進展していない点である。続縄文後半期における石狩低地帯の優位性の出現理由がまったく解明されていない点だが、これを端的に示している。道央部の優位性は、物質文化の広域分布・広域拡散や竪穴住居の欠如など、続縄文に特徴的に認められる現象の背景を説明するうえで鍵となる重要な論点であると考えられ、また擦文文化の成立過程とも何らかの関わりを持ってくる可能性すらある。この意味で、鈴木[2009a, b]の研究は、こうした方向性にもとづく研究の基礎となる重要性をもっている。なぜなら、続縄文前半期においては北海道島内の各地域が多方向・双方向的に影響関係をおよぼしているのに対し、後半期以降(後北C₂-D式期以降)にはほぼ一貫して道央部が遺物・遺構の属性変化のイニシアティブをとるようになることをはじめて属性分析を通して明らかにした事例だからである。しかしながら、なぜ道央部の優位性が出現したのかについては言及されておらず、学界のなかでこれ自体が課題であるとの認識もまだ定着していないように思われる。

道央部の優位性は、本州島以南との物資交換にも大いに関係しているはずである。だが、管玉・貝輪に代表される外来の物質文化が示唆する広域交渉は古くから注目を集めてきた一方で、東北北部の弥生文化の動向が続縄文にあたえた影響は物質文化の表層的な類似度の測定[加藤1992など]以外に議論が深まっていない。近年、鈴木[2009a]が物資交換の段階整理を試みており、擦文文化との関係までもが視野におさめられている点はすぐれた視点である。だが、物資交換の諸段階の変遷要因が、資源利用・居住形態・儀礼体系など社会としての側面とどのように関連づけられるのか、そこで道央部が果たした役割などの重要な問題については踏み込んだ考察がなされていない。

ここで指摘した2つの問題を解決するためには、続縄文と隣接諸文化との比較を概括的・感覚的にではなく、少なくともどこがどれだけ違うのか変わらないのかを記述できる精度で具体的な証拠にもとづいて行うことが求められている。同時に、続縄文内部にみられる変化の現象面をとらえるだけでなく、その要因を究明することを明確に課題として認識し、その課題を解明する方向性を常に意識することも求められる。こうした検討を実施するにあたっては、いくつかの切り口や素材があるはずであるが、以下、本稿ではひとつの試みとして資源・土地利用を視座として接近を試みる。

②……………続縄文文化の生業

(1) 植物資源の利用

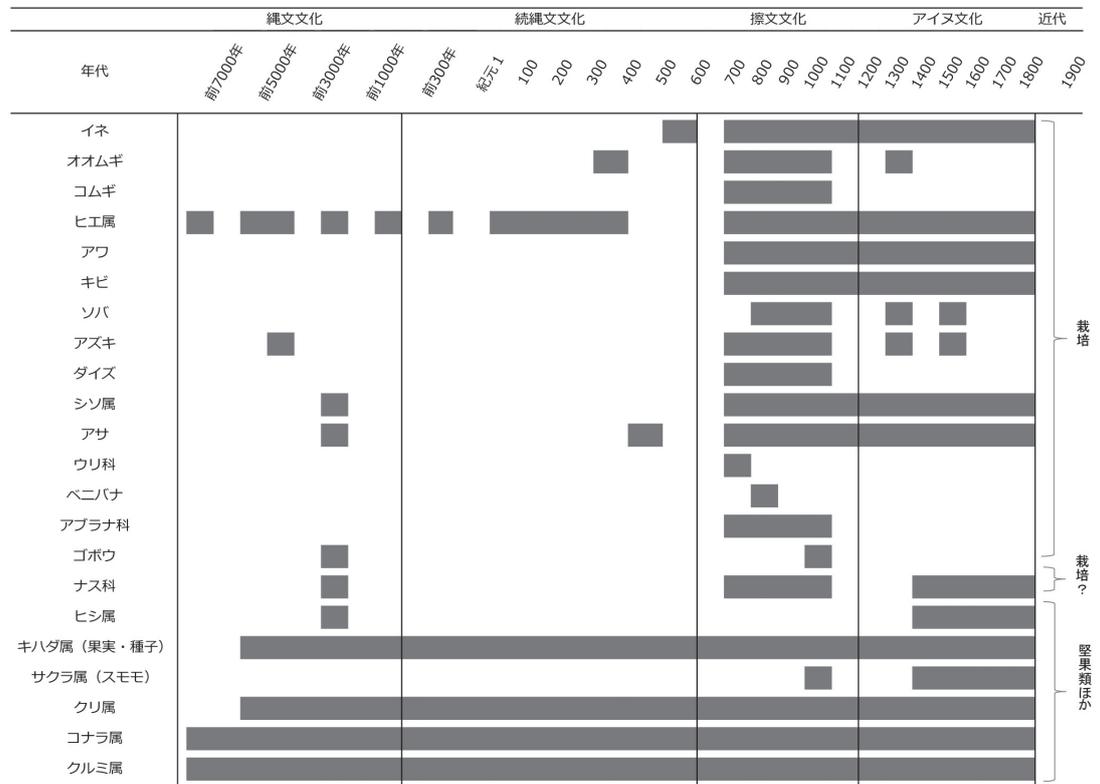
「漁撈の優位」は、交易とならぶ続縄文の大きな特徴と理解されてきた[藤本1988, pp.113-117]。

だが先にしめたように、生業のなかで漁労がしめる位置や魚類資源の利用方法を具体的にとりあげることで、続縄文の性格を究明しようとしている研究はほとんどない。ここでは、植物遺体および動物遺体を素材として漁労の特色や重要性の高低について検討してみる。

植物利用において、続縄文と隣接する地域・時期とのあいだに大きな違いはあるのだろうか。北海道島から出土した植物遺体をみると（第2図）、栽培種・野生種ともに利用の画期を続縄文文化には見いだすことはできない。イネ・オオムギは続縄文後半期に検出例があるが、イネは確実に本州島以南で栽培されたものであり他の交易品などともにもたらされているとみてよい。非常に数が少ないオオムギも現時点では続縄文文化圏内での栽培は考えにくい。本州島における明確な栽培痕跡も少ないため、今後、混入の可能性にも配慮して慎重に年代を決めていく必要がある。北海道島では、縄文早期からヒエ属が利用されているが、続縄文になってそれが活発化した形跡はいまのところはみられず [高瀬 2011c]、アサとともに出土は散発的である。

野生種にはクリ、コナラ属、クルミ属、キハダ属などがあり、いうまでもなくこれらは縄文文化期から積極的に用いられている種である。栽培種とくらべて圧倒的に出土量が多く、縄文文化以来の堅果類を中心とする植物利用は続縄文文化期でも支配的であったと考えざるをえない。

植物利用に関しては、縄文文化期から続縄文文化期にかけての連続性はきわめて高く、今後、この時期に植物利用の大きな画期が見いだされる余地はほとんどのこっていないと判断できる。第2図からは、植物利用の画期は擦文文化の初期にあることは明らかで、この時点ではじめて北海道島において農耕が一定程度定着・浸透したものと考えられる。



第2図 北海道島における主な植物種子の出土状況 [吉崎 (2003) をもとに作成]

(2) 動物資源の利用

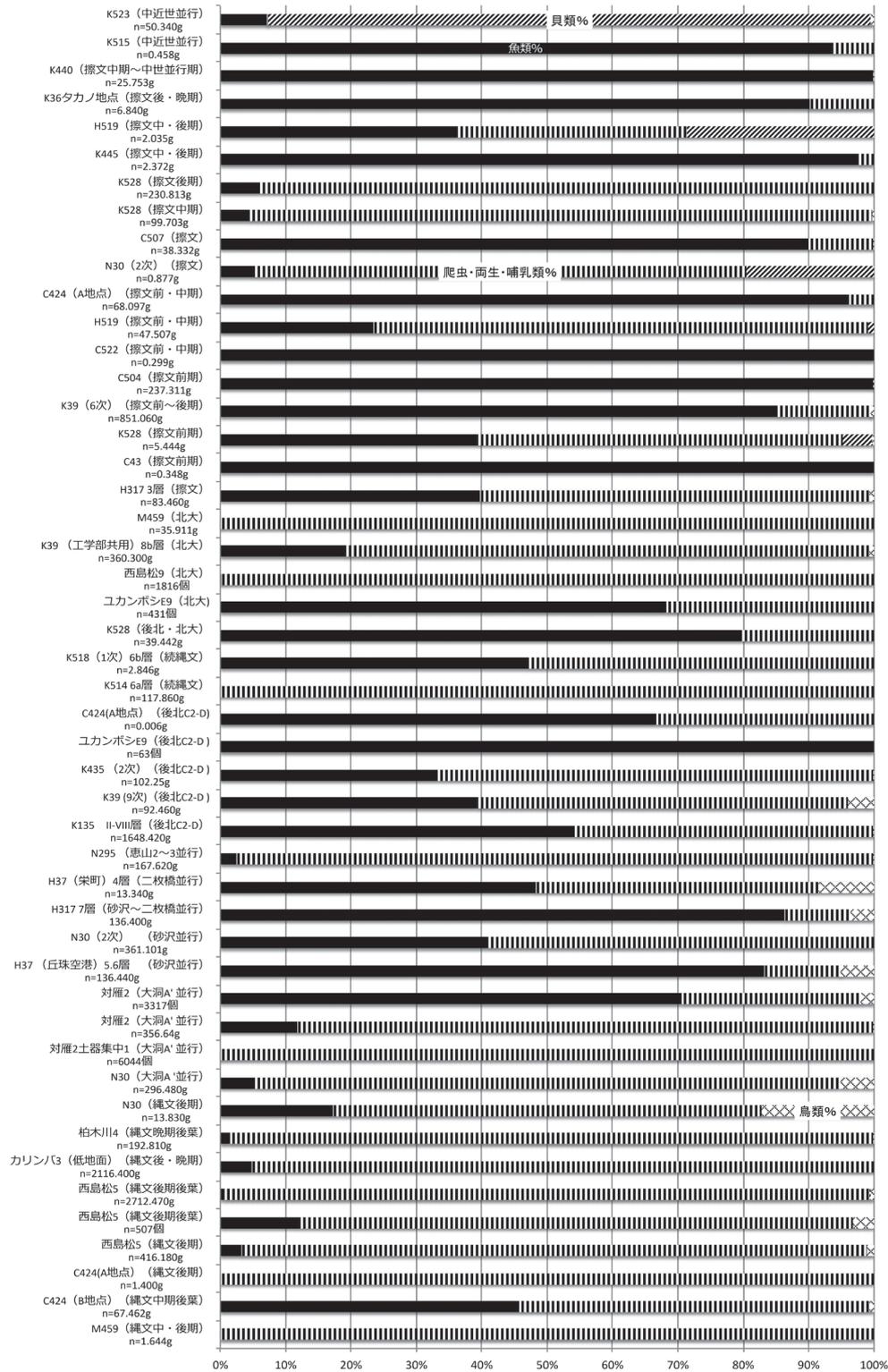
つぎに動物の出土状況のみをみる。第3図は石狩低地帯北部の、第4図はそれ以外の北海道島における縄文・続縄文の主要遺跡から出土した動植物遺体の集計結果である。データベースは、縄文・続縄文・擦文文化期（それ以外は任意に選択）のうち、遺跡内の全遺構もしくは一部の遺構から土壌サンプルが採取され、スクリーニングもしくはフローテーション法によって動物遺存体が回収された遺跡（記述の内容からこうした方法によって回収されたと推定される遺跡もふくむ）で、なおかつ遺存体の全量が個数もしくは重量で統一的に報告されている事例を選択して構築した（個数と重量の双方が報告されている場合は重量を優先して用いた）。量的な比較を意味のあるものとするために、個数と重量が混用されている事例、「多量」・「微量」などの表現が使用されている事例、発掘中に肉眼観察で確認されたもののみが報告されている事例、特徴的な資料だけが選択されて報告されている事例、検出された遺存体の全量が不明な報告事例などは基本的に除外している。

上記の条件に合致する調査は比較的新しい時期に多く、開発状況や調査方針による地域的な偏りがあることも否定できない。報告の単位（個数・重量）もまちまちで、データ細部の比較はかならずしも有効ではない。そこで、粗い比較にはなるが「魚類」、「爬虫・両生・哺乳類」（すべての遺跡で出土量のすべてもしくはほとんどを哺乳類が占める）、「貝類」、「鳥類」の比率について検討することとした。

石狩低地帯北部（ここでは恵庭市域以北を便宜的にこの地域にふくめる）では、札幌扇状地上やより標高の高い丘陵に、縄文中～後期の生活痕跡がのこされている。しかし、この時期の人々は、札幌扇状地の末端からさらに低位の沖積面はほとんど利用していなかったと考えられ、こうした地形面に比較的安定して遺跡がみられるようになるのは縄文後期末以降である。札幌市 N30, C424 (A地点)、江別市対雁 2 などの動物遺体組成からは、当時の人類が氾濫原に進出した主たる目的が居住や漁労にあったのではなく、哺乳類の狩猟、とりわけエゾシカ・ヒグマと鳥類の捕獲にあったことが読み取れる（第3図）。また、札幌市 M459, 恵庭市カリンバ 3, 西島松 5, 柏木川 4 のような丘陵上の遺跡であっても哺乳類が圧倒的多数をしめることが多く、この傾向は個数ベースでも重量ベースでも変わらないのが縄文文化期の特徴である。C424 (B地点) はやや例外的で、魚類の占める割合が重量ベースで 40% を超えており、そのほとんどがサケ科である。この地域におけるサケ科の利用が縄文中期までさかのぼり、しかも場所によってはかなりの量を捕獲している可能性を示唆している。しかしながら、石狩低地帯北部の縄文文化期の出土動物遺体は、哺乳類が圧倒的多数をしめる傾向はかなり明確である。

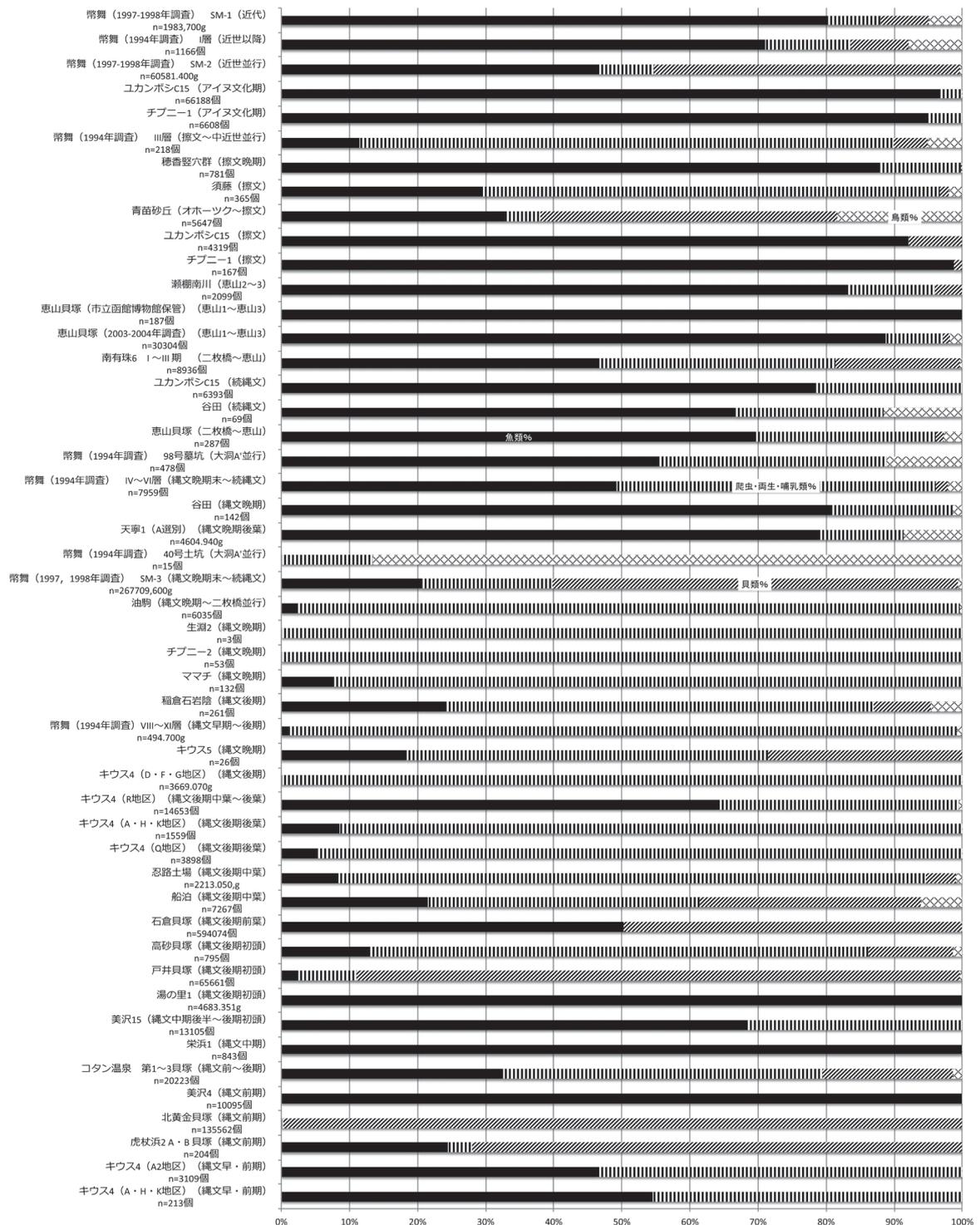
この傾向は、続縄文文化期初頭に大きく変化する。多くの遺跡で魚類（そのほとんどがサケ科である）のしめる割合が大幅に高くなり、札幌市 H317 のような小河川の自然堤防上に多数の焼土がのこされるキャンプサイトとともに、札幌市 H37 (丘珠空港地点) のような集落もみられるようになる。第3図では江別市対雁 2 の一部と恵庭市ユカンボシ E9, 西島松 9 以外はすべて重量で表示されているが、個数だけではなく重量でみても魚類が 3 割以上をしめる事例が続縄文文化で 7 割以上 (14 事例中 10 遺跡) にのぼることから、サケ科の利用が相対的に活発になったと考えられる。⁽⁹⁾

擦文文化期においても、重量ベースで魚類が 3 割以上をしめる遺跡は約 75% (16 事例中 12 遺跡)



第3図 石狩低地帯北部における出土動物遺体比較

[出典 K523：富岡2006b, K515：富岡2004c, K440：富岡2002b, K36タカノ地点：富岡1997, H519：富岡2007b, K445遺跡：富岡2004d, K528：富岡2008, C507：富岡2003, N30(2次)：富岡2004b, C424(A地点)：富岡2003, C522：富岡2007c, C504遺跡：富岡2005a, K39遺跡(6次)：富岡2001, C43：富岡2006a, H317：富岡1995, M459：富岡2005b, K39(工学部共用)：阿部2011, 西島松9：高橋・山崎2002b, ユカンボシE9：高橋1993, K518(1次)：富岡2007a, K514：富岡2004a, K435(2次)：富岡2000, K39(9次)：富岡2002a, K135：金子1987a, N295：金子1987b, H37(栄町)：富岡1998b, H37(丘珠空港)：富岡1996, 対雁2(大洞A)並行：富岡2006, 2007, N30：富岡1998a, カリンバ3：高橋2004, 柏木川4：土肥2010, 西島松5：バリノ・サーヴェイ株式会社2003, 金子2004, 2009, C424(B地点)：富岡2003]



第4図 石狩低地帯北部以外の北海道島における出土動物遺体比較

[出典 幣舞 (1994年調査)：金子1996, 幣舞 (1997, 1998年調査)：金子1999, ユカンボシC15：高橋2003, 須藤：西本1981, 青苗砂丘：金子・土肥2003, チブニー1：高橋2002, 穂香堅穴群：西本1994, 瀬棚南川：西本1983b, 恵山貝塚 (市立函館博物館保管)：金子・土肥2005, 恵山貝塚 (2003-2004年調査)：金子・土肥2005, 南有珠6：西本1983a, 谷田：西本1988, 恵山貝塚：西本1984, 天寧1：富岡ほか2011, 新美2008, 西本2008, 福井2008, 油駒：高橋2000, 生淵2：パリノ・サーヴェイ株式会社2005, チブニー2：高橋2002, ママチ：西本・増川1983, 稲倉石岩陰：西本1979, キウス5：高橋・太子1998, キウス4 (D・F・G地区)：高橋・太子2001, キウス4 (R地区)：高橋・山崎・太子2003, キウス4 (A・H・K地区)：高橋1999a, キウス4 (Q地区)：高橋2001, 忍路土場：金子1989, 船泊：西本ほか2000, 石倉貝塚：西本・新美1999, 高砂貝塚：西本1987, 戸井貝塚：西本・新美1993, 湯の里1：山田1979, 美沢15：高橋1995, 栄浜1：高橋・山崎2002a, コタン温泉：西本・新美1992, 美沢4：西本1980, 北黄金貝塚：西本1999, 虎杖浜2：西本1978, キウス4 (A2地区)：高橋1999b]

に達する。哺乳類の出土量が魚類を上回る事例も無視はできないが、それでもほとんどがサケ科で占められている魚類の骨が重量ベースでも全体の3割以上をしめることが決して珍しくない点は、縄文文化期に比して漁労（とくにサケ科資源）の重要性が高くなったことを示している。ただし、こうした傾向はいつまでも継続するわけではなく、現在のデータからは擦文文化の終末期～中近世並行期以降はサケ科を中心とする魚類だけの組成がみられる遺跡と、イシガイを中心とする淡水性の貝類が組成の中心となる遺跡に二極化していくようである。

続縄文文化期以降における魚類の増加は、石狩低地帯北部以外でも確認される（第4図）。知内町湯の里1、八雲町栄浜1、函館市石倉貝塚、千歳市美沢4・キウス4（R地区）、斜里町谷田、釧路町天寧1のように、縄文文化でも魚類の比率が高い遺跡がみられるが、それらは29事例中の1/4程度（約24%）にとどまる。それ以外の76%の遺跡で魚類が占める割合は個数ベースでも重量ベースでも2割程度以下がほとんどで、哺乳類や貝類のほうが圧倒的に多く出土している。

ところが、続縄文文化では、7遺跡の9事例すべてで魚類が哺乳類・貝類を凌駕しており、縄文文化とは明らかに異なる傾向がみられる。続縄文文化期にみられる魚類の比率は、オホーツク文化期と比較してもやはり高いといえる。たとえば、十和田～刻文期の土器が出土している青苗砂丘では、魚類だけでなく哺乳類（海獣類、とりわけニホンアシカが支配的）、貝類（カモガイ、タマキビガイ科、クボガイ、エゾアワビなどが支配的）が多く、鳥類も2割をしめるなど動物遺体の内容はより多様である。青苗砂丘の例は魚類が主要なカロリー源となるオホーツク文化の典型例とはいえないものの、続縄文・擦文文化期の人々も類似した環境を利用しているにもかかわらず資源利用の方式にかなり大きな相違点がある点は大変興味深い。

もうひとつ注目される点がある。縄文文化期であっても魚類の比率が高い事例が1/4程度あることにはふれたが、そうした事例はじつはほとんどが個数ベースで報告されているものであった。つまり、重量ベースでは魚類の比率が大幅に下がることが明らかなのが大半であるなかで、天寧1遺跡だけは例外的に重量ベースであっても哺乳類をはるかに凌ぐ魚類が検出されているのである。道東部太平洋側では、続縄文的な資源利用の特徴が縄文晩期後葉にすでに顕在化してきている可能性をも考えさせる。

擦文文化期の道東部太平洋側では、哺乳類が主となる組成がみとめられる。上述した石狩低地帯や上川盆地〔瀬川2005〕でも主張されているような相対的に活発な漁労活動は全島一律にみられるわけではない点は、続縄文文化との相違点になるかもしれない。また、擦文晩期～近代までは魚類（マダラやカレイ目を中心）・貝類（ウバガイが支配的）が多くなるという長期的な変遷を展望することができるが、まだ事例数が少ないためあくまでも現時点での見通しである。

(3) 漁労の地域差

すでに示してきたように、縄文文化期にくらべると、続縄文文化期では漁労の重要性が相対的に高まる傾向がひろく確認できる。だが、漁労活動の内容は必ずしも画一的ではなかったようである。かつて藤本〔1994, p.239〕は、渡島半島と釧路・根室地方では海岸への居住や独特の漁労具の発達からみて海への適応が高まったと考え、これに対して石狩低地帯や北見・網走地方ではサケ・マスを中心とする河川漁労に重きがおかれるようになったと予想した。こうした漁労の地域差を、魚種

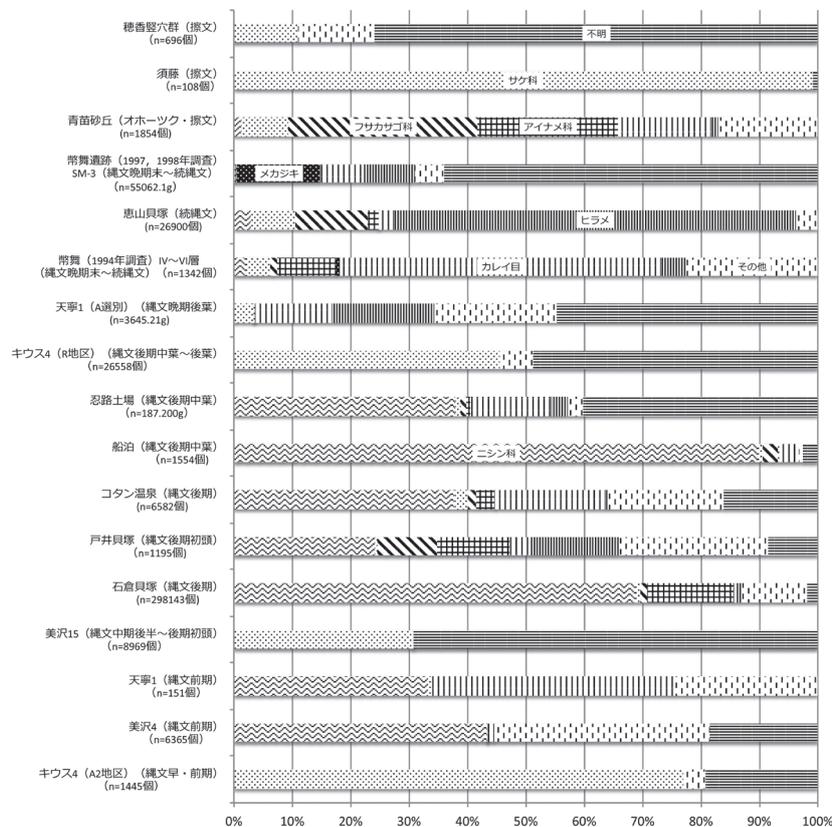
の面からさらに検討する。

石狩低地帯で出土する魚類のほとんどがサケ科によって占められている点は、すでに示してきたとおりである。それ以外の地域では、サケ科以外の海産魚類が中心となっており、サケ科が中心となる事例は続縄文文化期前半では知られていない。土地条件により、石狩低地帯ははやくからサケ科に移行していた点に注意が必要である。

第5図は、石狩低地帯北部以外の地域で魚類が多く出土した遺跡の魚種構成をしめしている。縄文文化期でもっとも主要な魚種はニシン科で、これにアイナメ科やカレイ目がつづく。内陸部では環境の制約からサケ科とその他（コイ科、チョウザメ科などが多く含まれる）、および種不明が大半をしめている。

続縄文文化期で注目されるのはヒラメである。縄文文化期においては、沿岸部でヒラメが出土しないわけではないがその割合は低く、高くても15%で多くの場合は1%にも満たない。ところが、渡島半島部の続縄文文化期ではヒラメがもっとも多く認められるようになり、恵山貝塚では個数ベースで2/3以上を占めている。これにフサカサゴ科とサケ科がつづき、縄文文化の多くの遺跡で多量に出土するニシン科はわずか2.8%にとどまる。縄文文化での利用率が低いヒラメが、続縄文文化ではメジャーな魚種となっているのである。

ヒラメやカレイ目が比率をのばす現象は東部太平洋側でもみとめられ、釧路市幣舞（1994年調査）IV～VI層（縄文晩期末～続縄文）では、ヒラメとカレイ目が個数ベースで全体の54.9%をしめている。



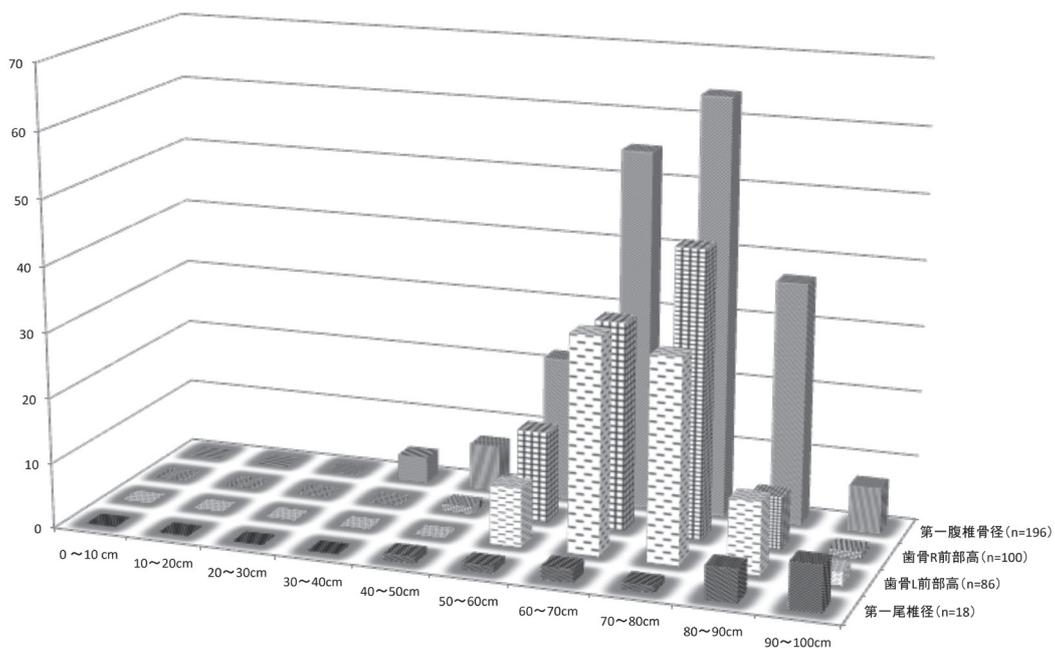
第5図 出土魚類の比較

同じ時期の同遺跡 SM-3 貝塚でもヒラメが重量ベースで全体の 8.7% を構成しており、これは種類のわかる魚種のなかでは 2 番目に多い数値である。この遺構でもっとも多いのはメカジキで、重量ベースで全体の 14.3% である。種不明をのぞけば、種のわかる魚類のうち 39.4% がメカジキとなる計算である。道東部太平洋側では、ヒラメ・カレイ目にくわえてメカジキも非常に重要な魚種になったと判断することができる。

渡島半島はヒラメ、道東部太平洋側ではメカジキ・ヒラメ・カレイ目に特徴づけられる漁労が展開するようになった要因はどこにあるのか。参考になる所見は、すでに動物遺体の分析報告のなかで繰り返し述べられてきている。たとえば西本 [1981, 1983a] は、続縄文文化期の渡島半島部では大きなオットセイの雄が選択されて捕獲されていたことを推定するとともに、ヒラメ・カレイ・マダラに非常に大型のものが多くを指摘している。

ヒラメの大きさは、恵山貝塚出土の動物遺体を同定した金子浩昌・土肥研晶によっても注目されている。「歯骨長 70mm 以上に達する標本も少なくなく、さらに最大で推定 80mm に達する標本もあった。これらは体長 60cm 以上、大型の個体は 70cm から 80cm になり、おそらくヒラメとしては最大になると思われる。大型サイズのヒラメが出土することは決してめずらしいことではないが、そうした個体の多いことは類例がないと思われる」[金子・土肥 2004, p.62]、また魚類のなかではヒラメの遺体が圧倒的に多いことに注意したうえで、「出土するヒラメは大型の個体も多く、魚骨層 2 中から並んで出土した腹椎～ 18 番目の尾椎までの 19 連の椎骨から体長を復元すると、約 1m の大きさに相当するものとなった」[金子 2005, p.79] と述べられている。

第 6 図は、現生標本との比較によって推定した恵山貝塚出土ヒラメ骨格の体長である。計測に用いた標本は、金子・土肥 [2004, 2005] によって報告されている左右の歯骨、第一腹椎、第一尾椎



第 6 図 恵山貝塚出土ヒラメの推定体長

のうち、欠損に起因する計測不能の標本をのぞいた全点である。報告によると、歯骨Lは245個、歯骨Rは287個、第一腹椎は213個、第一尾椎は23個出土している。このうち計測が可能であったのは、歯骨Lが86個（全体の35.1%）、歯骨Rが100個（46.9%）、第一腹椎196個（92.0%）、第一尾椎18個（78.3%）である。歯骨は欠損によって全長が計測できる標本が皆無に近い状況であったため、やむをえず前部の高さ（歯骨前部高）を採用した。第一腹椎、第一尾椎は、前方の直径を計測した（第7図）。体長は、現生標本10個体の計測値からもとめたつぎの1次方程式によって推定した（ y =推定体長cm, x =各部位の計測値cm）。

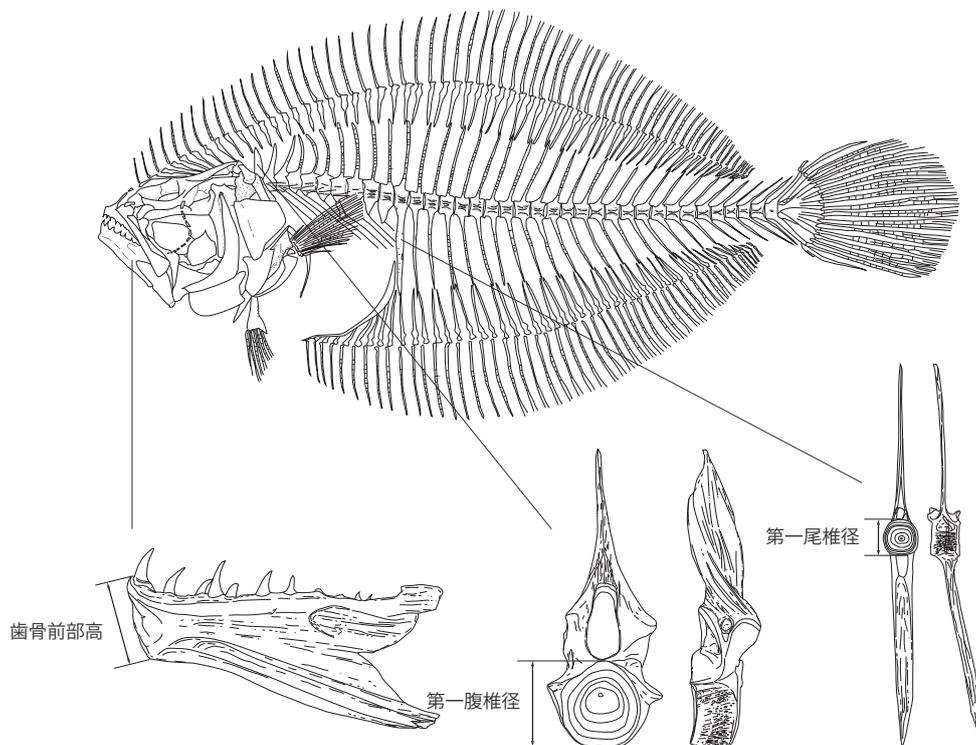
$$\text{歯骨 (L・R) 前部高 } y=35.399x+8.9757$$

$$\text{第一腹椎 } y=52.702x+6.7203$$

$$\text{第一尾椎 } y=51.705x-2.752$$

第6図から、いずれの部位を用いた推定でも、体長70cm以上の大型個体のしめる割合が80%以上に達することがわかる。なかには、ヒラメとしては最大級となる90cm～1mほどの超大型個体も見受けられる。体長50cm以下の個体がきわめて少ないことからわかるように極端に大型にかたよった構成となっており、続縄文のヒラメには種の選択性だけでなくサイズの面にも明確な特徴がある。

金子・土肥〔2004, p.62〕は、「大量のヒラメに比べると同じ底棲魚でもカレイ類の少ないのが対照的である」こと、さらに「特に大型の組み合わせ釣りはヒラメ、マダラ類を目的に作られていたことが考えられる」とのべている。ヒラメと生息環境がかさなるカレイ類の少なさは、ヒラメだ



第7図 ヒラメ骨格と計測部位

けを選択的に捕獲していた可能性と、一般的なカレイ類よりもさらに深い海域でのヒラメ漁が行われた可能性を示唆する。

水深 100m 以上に棲息するヒラメは、産卵のため水深 50m 未満の岩礁近くの砂泥域・砂礫域とのあいだで季節的な深淺移動をおこなう [上田ほか編 2003, 尼岡ほか 2011]。北海道島沿岸では 6～8 月に浅い海域にあつまると、先史時代における通常の漁期も春～初夏であったと考えられている。続縄文文化期では出土量も多いため、あるいは産卵期以外にも深い場所で漁が行われていたかもしれない。ただしその場合でも、同じ海域にはマツカワ・オヒョウなどヒラメと同程度かそれ以上に大型化するカレイ科が棲息するにもかかわらず、ヒラメにこだわった漁労が行われていたことは確実である。種とサイズというふたつの指標にかなり強い人為的選択がはたらいた特異な漁労活動が想定される。続縄文文化に特徴的な大型漁具がこうした漁に用いられていたとする金子・土肥の意見は、筆者 [高瀬 1996] の漁具に関する機能・用途論的な考察結果とも整合的である。

道東部太平洋側においては、メカジキ、ヒラメ、ブリ、カレイ科、アイナメ、ズキがやはり非常に大型である。純粋な生計活動以外の役割をもっていたアイヌのメカジキ漁はよく知られており [鈴木 1994 など]、実際にアイヌ文化期の遺跡からの出土例も多い。メカジキ吻部の埋設遺構のように、特殊な取り扱いをうけた痕跡は擦文文化期から認められるようである [峰山・大島・瀬川 1984]。これにさきだって続縄文文化期では、道東部太平洋側でやはり大型の個体をねらった積極的な捕獲がはじまっているのである。

なお、釧路市天寧 1 遺跡の事例は、メカジキとヒラメの比率がすでに縄文晩期後葉から高まっていた可能性を示唆している。ヒラメのなかには体長 1m クラスの大型のものもみられるようであるが [鈴木 2011]、それらの大型個体がヒラメ全体のなかに占める割合はまだ明らかにはなっていない。ただし、特定の種の大型個体にこだわった捕獲が確認され、なおかつこうした資源利用が続縄文の重要な要件であるという認識が共有される状況にいたったならば、道東部太平洋側では現在縄文晩期後葉に位置づけられている文化は将来的に続縄文に編入するといった柔軟な対応も求められることになるかもしれない。

漁労への傾斜と大型魚への執着は続縄文文化に広くみられる傾向であるが、利用する種には地域差があり、渡島半島ではヒラメ、石狩低地帯ではサケ科、東部太平洋側ではメカジキ・ヒラメ・カレイ目が主要な漁労対象である。道東部オホーツク海側での状況はまだ不明な部分が多いが、藤本が予想したとおりサケ・マス中心であれば石狩低地帯との類似性が高くなる。ヒラメやメカジキがメジャーな漁労対象であった可能性は低い、それ以外の魚種が多量に捕獲されていることがわかればあらたな類型となる可能性もこのさされる。現段階では手がかりはあまり多くないが、今後、他地域との比較が可能な情報がえられることが期待される。

(4) 資源構造の拡張的開発

続縄文文化の生業の特色は、「異なる生業部門の登場」にあるのではなく、特定の部門、すなわち漁労への「特化」にあるといわれる [鈴木 2009a, 2009b, 2010]。農耕がはじめられることなく、漁労の役割が高まっていることを考えると、このような見解にも一定の根拠があるように感じられる。だが、「特化」の語は、従来から行われていた生業活動のうち、特定の部分領域への依存度が

高まる状況に対して使うのがふさわしい。続縄文のように、それまでほとんど利用されていなかった特定の種の、しかも大型の個体に固執した資源利用が一気に確立する場合は、縄文文化との連絡性が乏しいため「特化」とはべつの術語で表現したほうがその本質をよりよく表現できると思われる。しかも、それまでサケ科の捕獲地としてはあまり積極的に利用されてこなかった石狩低地帯でも土地利用の方式が転換する実情を示しうるような概念が好ましい。筆者は、この時期の生業変化の特徴を、「資源構造の拡張的開発」とよぶことを提案したい。

生態学では、資源（岩石のように更新不可能な資源と生物のように更新可能な資源をふくむ）が分布する場所を、具体的な空間である産出場所（production area）や生息場所（habitat）などとよぶ。しかし、これは時系列を組み込んだ概念ではないため、とくに生物資源に関しては生活史や環境条件を組み込んだ概念で資源の分布をいいあてる必要がある。この観点からは（ n 次元）ニッチ niche [Hutchinson1957] がふさわしいようにも思える。しかし、人間にとっての資源利用・管理という脈絡で使用することを考えると、慣用的に用いられている語ではあるが水産（資源）学などというところの「資源構造」、「時空間集団構造」、「種内個体群構造」といった概念のほうがより適当と思われる。本稿では「資源構造」を用いたい。

資源構造は、ある生物資源の時間的（季節、周期など）、空間的（平面的・垂直的分布、棲息環境的・地形学的偏在など）、質的（雌雄、年齢、大きさ、色、形状など）構成である。空間的構成はいわゆる実現ニッチにちかいが、それは種の生活史に影響を受けて時間的に変化する。また、人類の文化的な分類基準もふくめて「どのような」資源であるかも考慮すると、「好ましい資源」のいる時間的・空間的位置は資源構造全体の中ではごく一部かもしれない。求める資源の質にこだわらないなら時間・空間の変数のみを考慮に入ればよいが、大型の個体、色がきれいな個体、卵をもつ個体などといった人類の側がもつ条件が加われば、それにとまって利用できる資源構造の領域は狭くなることになる。

ヒラメの資源構造という観点からみれば、渡島半島の続縄文文化期ではそれまでほとんど利用されていなかった大型個体が属する資源構造の領域を積極的に利用するようになった、と言い換えることができる。同じことは、道東部太平洋側のメカジキ・ヒラメなどにもあてはまる。石狩低地帯のとくに北部では縄文文化期まではサケ科の利用そのものが低調であったため、サケ科魚類の資源構造のうち内陸部で利用できる領域（成熟した雌雄が属する領域）を利用しはじめたと言い換えることができ、この点が土地の利用方法の変化や遺跡数の増加とも連動していると考えられる。たんに漁労への依存度が高まったということではなく、縄文文化にはほとんど手がつけられていなかった資源構造の特定の領域に、地域ごとの方式で開発の手がおよんだことが重要なのである。資源構造のなかで利用できる領域を拡げたことを「資源構造の拡張的開発」（expansive exploitation of resource structure）、そこで開発された資源を「拡張開発された資源」（expansively-exploited resource）⁽¹⁰⁾とよぶ。現時点ではまだ仮説的ではあるが、この点は続縄文経済のおおきな特徴のひとつになりえると考えられる。

(5) 資源構造の拡張的開発と技術

資源構造の拡張的開発は、多くのばあい技術革新がともなっているはずである。その代表的な

事例が、魚形石器や優麗な装飾を伴う骨角製銚頭をはじめとする大型の魚類の捕獲に目的を特化させた漁労具であろう [高瀬 1996]。道東部では、漁労具の大型化現象がまだ明確には見いだされていないため、筆者はこれまで縄文文化とのちがいをあまり積極的には強調してこなかった [高瀬 2002b, 2009]。だが、先述のとおり大型のヒラメ・メカジキなどの出土を考慮すると、やはり一定の固有性・特殊性は認められてしかるべきであろう。

続縄文の漁労活動は、個人や少人数の作業グループの社会的評価に直結する性格をもっている。小さなヒラメをたくさん捕ることよりも、少数でも大きなヒラメを捕ることを優先する価値観は獲物の「量」ではなく「質」に高い価値をおいた漁労活動である。そのために目的を特化させた道具を生み出し、より性能の高い道具づくりの試行錯誤が繰り返される [高瀬 1996, 2002b]。形態・材質・付着物などの多様性からみて、こうした漁労具の製作・改良は個人単位で秘匿的に行われていた可能性が高いと思われる。その漁労具が墓に副葬されることが多い事実は、副葬品が被葬者の社会的評価を表しているだけでなく、埋葬者は生前の被葬者と労働組織のうえで近い人物たちであったと考えることができる。道東部太平洋側にみられるような墓の構築方法の違いは被葬者の社会的評価とともに [高瀬 2010a]、労働組織の系譜とも関係しているのであろう。

ところで、特定の道具の発達が続縄文に特徴的な資源開発と密接に関連しているという見解は、すでに 1970 年代から提起されている。すなわち、「縄文文化の技術伝統は踏襲しつつも、ある種の道具の発達が著しく、ますます新しい対象への適応を可能にした」 [木村 1976] というものである。ただし、ここでいう「ある種の道具の発達」とは革新的な漁労具の開発ではなく「定型的な石製ナイフ」の普及をさしている点に注意が必要である。したがって無条件にこの発言にしたがうことはできないが、かりに「定型的な石製ナイフ」の普及と魚類資源の加工が関係していることが立証されれば、この発言は重要性を帯びてくる。今後は、「定型的な石製ナイフ」の本格的な機能・用途論的研究が必要である。

いっぽう続縄文の石器群には、なんら技術的な新規性がみられないとする意見もある。「恵山文化の石器群構造が、基本的に縄文時代のそれと質的に変わる所がないことから決して技術的に跳びはねて優秀なものとは思われず、ましてそれがオホーツク文化にみられるような専門的なものとは言い難く、社会構造自体も縄文時代のそれと大きな差を認めることは難しいのではあるまいか」 [土田・上野 1976, p.172]。たしかに、石器をふくむ物質文化には縄文文化との連続性がつよい部分もあり、全体が別物におきかわっているわけではない。研究が進展した現在では漁労の重要性をことさら強調しなくてもよいという意見もあるが [小杉 2011b]、資源利用の内容は縄文文化晩期までの状況からはみ出している部分も多い。ここが、縄文と続縄文の関係を考える際のひとつの論点になることは確実とみてよいであろう。

後北 C₂-D 式以降の続縄文文化後半は沿岸部ではなく河川流域で遺跡が増加し、出土動物遺体もサケ科の積極的な利用をしめしていた。サケ科利用と結びついた沖積低地への進出は、続縄文文化前半期の石狩低地帯ですでにみられたものである。その源流は縄文文化後・晩期にあるとはいえ、続縄文文化前半期の石狩低地帯において採用されてきた資源利用の方式をある意味で極端なかたちで発展させ、しかも空間的に非常に広い範囲にその方式が適用されるようになるのが後半期のもっとも大きな特徴といえる。

続縄文文化前半期の多様な資源の拡張的開発方法のひとつにすぎなかった石狩低地帯の資源利用方法を基盤として、後半期に地域性が解消されていくのである。石狩低地帯の方式を利用して、それ以外の地域で従前に利用されていなかった資源の確保に積極的に乗り出す、その裏返しとしてヒラメやメカジキなど従来重視されていた資源を多量に出す遺跡は消滅していく。新たな状況が立ち現れてくる背景には、食料資源の利用方法だけでなく、北海道島内の集団関係、隣接地域との関係、物資の交換品目や方式、道具の運用方法、居住形態や年間の活動スケジュールなどの変化との連動性が考えられる。このうち、道央部の優位性との関係で重要な論点となりうるのが物資の交換や入手の方法であるため、つぎにこの点について考察する。

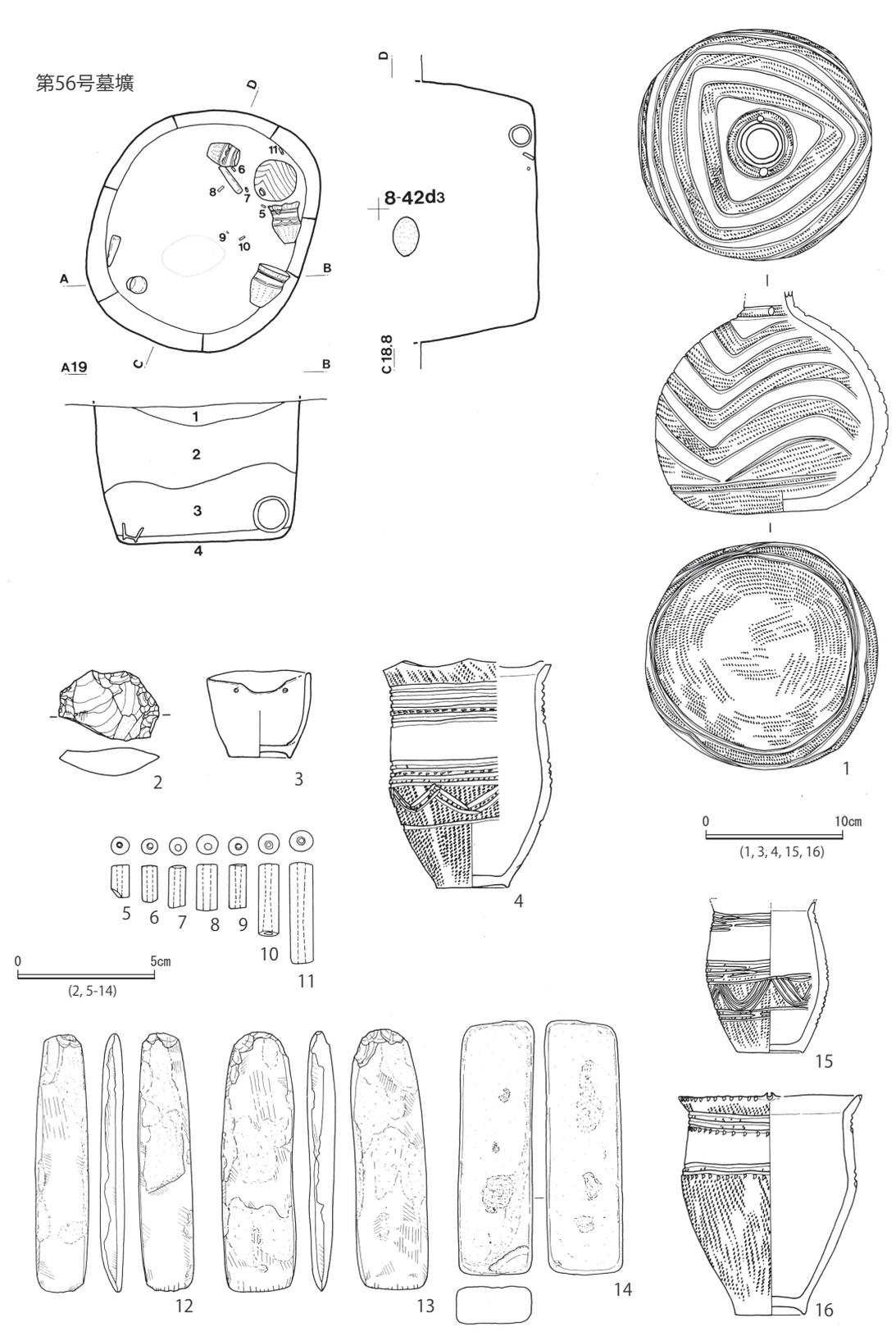
③……………続縄文文化の交換

(1) 石狩低地帯の役割

続縄文文化の物資交換を示す事例として、イノシシ牙製品やイモガイ・ホタルガイ・タカラガイ、マルツノガイ、マクラガイ製などの装飾品がよく知られてきた [大島 2003 など]。これらは、縄文文化から存在していたルートによってもたらされたもので、太平洋側を経由して運搬されていたのではないかと想定されがちである。しかし、大島 [2003, p.44] が指摘しているように、オオツタノハ製の貝輪は縄文後期以降の関東平野ではほとんど流通しておらず、分布の中心も東海地方以西に移ることから、続縄文期の資料は日本海側を経由してもたらされていた可能性が高い。日本海側で物資の広域なうごきが活発となる弥生文化圏内の動向とも矛盾はなく [石川 2012 など]、管玉と同様に日本海側の交換ルートが機能していたと考えてよいであろう。

このような弥生文化前・中期の装飾品の対価として、続縄文前半期の北海道島から運搬された可能性がある財として、黒曜石や緑泥石片岩（緑色泥岩）といった石器原料や石器製品が考えられる [高瀬編 2012 など]。続縄文後半期には、サケ科をはじめとする動物質資源が食糧資源としてだけでなく交易資源としてもきわめて重要な役割をもつようになったのであろう。現時点ではサケ科の資源と、外来系物資の直接的な結びつきを論証できるわけではないが、こうした関係を想定しないと道央部の優位性や後半期における全島のサケ科漁業への移行は説明がつかない。本州島におけるサケ科の出土状況など個別の課題については今後の検証がもちろん必要であるが、ここでは管玉の入手力からみた道央部の優位性について確認することで、サケ科資源の重要性について間接的に検討を試みたい。

青野 [1999b] による管玉の集計結果にもとづけば、後北 C₁ 式よりも前の段階においては道南部で 20 点 (13.6%)、石狩低地帯で 125 点 (85.0%)、道東部で 2 点 (1.4%) であり、北海道島にもちこまれた管玉の 8 割以上が石狩低地帯で消費されていることがわかる。なかでも江別市元江別 1 と石狩市紅葉山 33 号遺跡の出土量は圧倒的であるから、石狩低地帯のなかでも日本海側に水系が通じる北部に集中しているとみてよい。遺跡数ベースでは必ずしも大きな地域差は出てこないものの、個数ベースで見ると石狩低地帯とりわけ日本海側で続縄文前半期から本州島以南からの外来物資の入手力が高かったと考えることができる。石狩低地帯北部では、数は少ないが海獣骨や海棲魚骨が



第8図 元江別1遺跡墓56と出土遺物 [江別市教育委員会 1981]

しばしば出土することも沿岸部との日常的な物資のやりとりの傍証になる⁽¹¹⁾。

他に大規模な集積地が想定できない以上、道南部を交換上の中継地とはしない石狩低地帯と本州島東北部との直接的なむすびつきにもとづく物資交換があったと考えざるをえない⁽¹²⁾。このような理解が成り立つとすれば、これまで道央部への「恵山式の波及」として理解されてきた現象は、べつの評価が可能となるかもしれない。石狩低地帯でおもに墓の副葬品として出土する恵山1・2式〔高瀬1998〕は、恵山式よりもむしろ宇鉄Ⅱ式に代表されるような津軽半島の土器に類似している。道南部にはみられないほど多様な磨消縄文がほどこされ、器形もヴァリエーションに富む土器群は、単純に道南部からの影響のもとで出現したと理解することが難しい（第8図1など）。この点で、津軽半島をはじめとする本州島東北部日本海側との直接的な関係が想定できるのであれば、より整合的にその由来・影響関係を説明することが可能となる。

かつて筆者は、道央部における恵山式の定着過程を道南部との関係という枠組みで検討したことがあるが〔高瀬1998〕、副葬品としての恵山1・2式土器の一部については、道南部を介さない本州島からの直接的な影響関係も考慮に入れる必要があるのではなからうか。また、宇鉄Ⅱ遺跡で多量の管玉が出土していることからわかるとおり、津軽半島部は東北北部のなかで、より南部とのコネクションをもった物資入手力が相対的に高い地域であった点も忘れてはならない。こうした地域と道央部との交換関係が縄文前半期から機能していたことが、のちの道央部の優位性に何らかのかたちで関与している可能性は考慮されてよいであろう。

(2) 利器の外部依存

縄文前半期の鉄器の報告例は少なからずあるが〔本間1995〕、弥生文化開始期の議論の教訓をふまえて、その年代はきわめて慎重に考えなければならない〔石川2008など〕。また、弥生文化圏内の鉄器の加工技術・出土量・流通状況〔野島2009など〕や石器の利用状況からみて、たとえ縄文前半期の北海道島に鉄器があったとしても、供給量はきわめて少なかったことは疑う余地がない。この段階において、石狩低地帯北部の集団はすでに直接的な交換の相手を本州島東北部の日本海側にえていたはずであるが、そのネットワークはまだ鉄器の交易ルートではなかった。

この状況が大きく変わるのが、後北C₁式期である。おそらく、従来の日本海側のネットワークを足がかりにしてさらに南へ物資をもとめはじめた痕跡が、南赤坂〔前山1999〕をはじめとする新潟県域の後北C₁式土器の出土例であろう。後北C₂-D式期以降は、遺跡の分布からみて太平洋側のほうがより物資交換の重要性が高まっていったことが読み取れる。後北C₂-D式期も道央部が物質文化の変化の方向性を規定し、遺跡数・遺構数・出土遺物数でも他地域を凌駕している。このため、太平洋側のルート開拓に先導的な役割を果たしたのも、もともと物資交換で有利な条件を持ちあわせていた道央部の集団であったにちがいない。後北C₁式期以降の後北式の拡散現象の背景には、この時期から本州島以南で供給量が増加した鉄器が絡んでいるはずである。

また、石器の減少と鉄器の増加のあいだにつよい相関関係があることは確実であるが、石器の減少をただちに鉄器の普及に結びつけて解釈することはできない。鉄器入手の仕組みができあがったことと結びつけて理解されるべきであり、利器を外部に依存できるだけの社会的関係の構築、流通量の確保、流通ルート・運搬手段の確保、運搬の担い手の確保などの条件がそろったからこそ、石

器の製作が低調になっていくのである [安藤 2006]。将来にわたって鉄器が供給されうる社会関係が構築されたことが続縄文文化における石器の減衰現象に現れているのであり、それほどまでに安定した鉄器の供給量や流通体制が続縄文文化期の後半期にできあがっていったと考えるべきであろう。

ただし、続縄文後半期の人々が本州島にまで足を伸ばしていた目的が、鉄器の入手のみにあつたとみることにも危険である。つぎにみるように当時の人々のなかの少なくとも一部に移動性の高い生活をおくっていた集団がふくまれ、物資の運搬や交換においてもそうした集団がはたす役割が大きかったとするならば、そうした生活様式や生業との関係のなかで鉄器の役割を評価する必要があるからである。たとえば、移動生活に適している道具であるから鉄器を求める、移動生活をしているから鉄器を交換によって入手できる、サケ科・その他の動物資源を確保する、といった社会的諸側面は個別に分断されているのではなくすべて相互に結びついており、このなかの特定の部分だけが唯一の目的であると考えすることはできないであろう。

移動性のたかい生活をおくる人々にとっても、鉄器は魅力的な道具になりえる。速度効率・エネルギー効率の双方において石器よりも3倍以上優れていること [Sarayder and Shimada 1971]、楔や針状の鉄があれば石器では不可能な作業も効率的に行うことができるようになることは、居住形態にかかわらず多くの人々にとって好意的に受け止められる要素となりえる。また、コンパクトなツールキットが実現できるという意味では、少数の器種を多様な用途に利用することが可能で、刀子と斧があれば石器で行うほとんどの作業をこなすことができる点は移動性の高い生活においてとくに有効に作用する。さらに、原石の入手・運搬の手間、多様なハンマーや固定具などの運搬、製作にともなう多量の debitage が排出されることを考えれば、砥石さえあれば日常的なメンテナンスが容易にできる鉄器は石器よりもはるかに効率のよい道具である。その反面、生産や入手に関しては外部に大きく依存せざるをえなくなるのが、続縄文の段階における宿命であろう。

続縄文後半期に進行する道具の鉄器化は、石器以外の道具が利器のなかで主要な役割を演じるようになったという点だけでなく、利器の外部依存や利器を入手するための対価としての北海道島内の動物資源の開発を加速させた点において縄文文化とはことなる側面をもっているといえる。ただし、鉄器がおおきな役割を果たしはじめるのは続縄文文化期のはじめからではない。続縄文と隣接諸文化の関係を検討する際に、この点をどこまで重視するかもひとつの要点になってくるに違いない。

(3) 居住形態の問題

居住形態は、上記のような物資交換をささえる重要な社会的側面のひとつである。本州島東北部への後北 C₂-D 式の分布域拡大の背景の解釈には慎重な立場もあるいっぽうで [木村・鈴木 2011]、積極的に北海道島からの移住者が居住していたことを認める発言も多くなってきている [瀬川 2011, 松本 2013 など]。石井 [1997b, 1998] はさらにふみこんで、後北 C₂-D 式期における堅穴住居の消滅、出土遺物の少なさ、焼土のみが密集する事例などを根拠に、当時の集団はきわめて移動性の高い生活を送っていたという解釈を提起している。

この仮説は積極的に論評・検証がなされてきているとはいいがたいが、八木 [2010] は肯定的に

とらえ、松田 [2005, p.11] は「集落が未検出なことをもって『非定住＝遊動』とする見解」は「あまりに単純」と批判する。ここでは物的証拠をとりあげながら居住施設の問題から居住形態について一定の見通しを述べてみたい。居住施設の内容があきらかになっても移動性の高低が測定できるわけではないが、それでもなお、建物の特徴は当時の居住形態を考えるためにもっとも基本的な変数のひとつにちがいないからである。

竪穴住居の地下部分の深さが縄文晩期いらい浅くなる傾向や、擦文文化期などにみられる竪穴の掘り込み外に柱穴が存在する例などに配慮し、続縄文後半では本来存在した遺構が見つかっていない可能性があるという意見も依然として根強いのこっている [木村・鈴木 2011 など]。だが、これまでに多数検出されてきている後北式期の地床炉は、当時の生活面がのこっていることが決してめづらしくないことを示しており、竪穴住居の浅さや柱穴の位置が主因となって居住痕跡の検出率が下がっていると考えするには無理がある。やはり素直に、掘り込みをもつ居住施設が作られなくなったと考えるべきであろう。これまで後北 C₂-D 式期の竪穴住居跡としてとりあげられることのあった遺構も、石井 [1997b] による検証のとおり所属時期の信頼性はひくく、現時点で確実な竪穴住居はないとみるべきである。

焼土群のなかにある柱穴をさがす努力もおこなわれてきたが [上野編 1987 など]、おそらくここで見出される建物のすがたが予め描いていたイメージからかなりかけ離れているために、居住施設として積極的に評価されてはこなかった経緯がある。また、遺構としてのこる施設の痕跡だけでなく、限られたスペースを人間が繰り返し使用することによる生活痕跡の分布状態にはほとんど関心がはらわれてきていない。かりに、柱穴の分布論と遺跡形成過程論が早い段階で融合していれば、議論はことなった展開をみせていたかもしれない。このような視点で、札幌市内の遺跡を再検討する。

第9・10図は、札幌市 K514 遺跡における遺構・遺物の分布状況をしめしている。この遺跡は河川の自然堤防上に焼土や炭化物集中区が分布する後北 B～C₁ 式期の包蔵地で、発掘区内から竪穴住居は発見されていない。後北 C₂-D 式より古い段階ではあるが、すでに竪穴住居数が激減している時期である。第9・10図からは、土器や石器・剥片・碎片・動物遺体・クルミ内果皮といった多くの種類の遺物が、焼土（濃いトーン）・炭化物集中（薄いトーン）と重複して分布する傾向を読み取ることができる。しかしながら、安山岩製の石器・剥片だけは焼土・炭化物集中を避けるようにひろがっており、きわめて不自然な分布をしめしている。この遺跡の遺物分布が二次廃棄の結果である可能性も完全には排除できないが [田村 2012]、剥片・碎片が土器・石器とおなじ分布パターンを示すことから、筆者は調理や石器製作をおこなった位置で一次廃棄されたものが本来の位置をほぼ保ちながら洪水によって埋没した痕跡と考える。ここで重要なのは、廃棄の方式がどのようなものであるにせよ、安山岩製の石器・剥片の分布はそれ以外の遺物とのあいだに何らかの遮蔽物を想定しないと説明できない点である。焼土の周囲に壁や覆いがあったと考えざるをえない。

焼土間を連結するように分布する炭化物は、焼土（炉）の利用法とも関係するが、人間の移動経路を反映しているケースもありうる。続縄文期前半の例ではあるが、竪穴住居跡の内部では人間の往来がはげしい出入口施設（張り出し）の底面（生活面）にそって炭化物が分布する（第11図）。K514 遺跡などの焼土が分布する遺跡では、焼土と焼土のあいだにのびる炭化物や、焼土から不自

然な形態で一方に炭化物の分布が延長されている場合もある。すべての炭化物にあてはまるわけではもちろんないが、堆積速度の早い地形面上の遺跡では炭化物のひろがりや人の歩行の方向・範囲を規制する遮蔽物を推定するための重要な情報源になりうる。

一般に、北海道島内でみつかっている続縄文文化の焼土群は屋外炉と考えられており、この遺跡も例外ではない〔石井・出穂・上野 2004〕。焼土の周辺には明確な柱穴などの施設がないため、遺構から積極的に居住施設であることを立証することはきわめて難しい。ただし、夏季はともかく、それ以外の季節に北海道島で人間が居住する施設には、かならず炉とそれを取りまく壁・覆いが存在していたはずである。たとえ簡単なつくりのテントだとしても、これまでみつかっている焼土群のなかにその間接的な痕跡をさがす視点は、これからも重要になるであろう。K514 遺跡の事例は、遺物や炭化物の分布がその手がかりになることをしめしている。

続縄文後半期の居住施設がこうしたテントであるならば、焼土が密集している遺跡には石井〔1997b〕の予想のとおり集落も含まれていることになる。ただし、先述のとおり建物の存在と居住形態とはべつの問題であるので、住居が確認できたからといって定住性の高さが判定されるわけではない。この問題を考えるためには、動物遺体をもちいた各遺跡の季節性推定とともに、遺物の総出土量を前後の時期と比較してみる手法が有効と考えている。しかし、こうした検討に耐えうる報告書は非常に少なく、膨大な量の遺物を計量しなおす必要があることからまだ着手できてない。

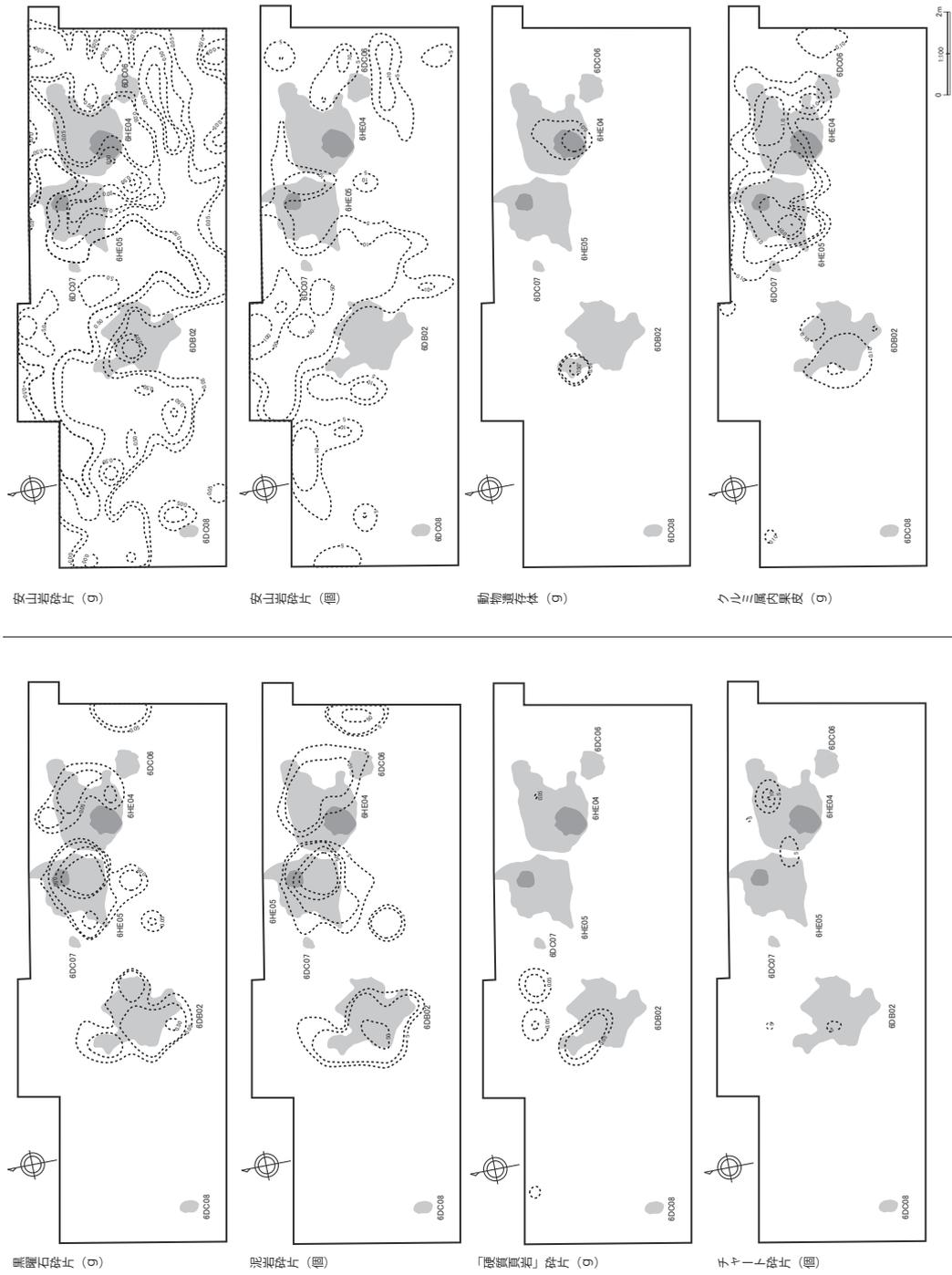
したがって、石井〔1997b〕が想定するようなすべての社会構成員をまきこんだ移動性の高低について、現段階では確固たる結論をだすことはできない。しかしながら、簡便なテントの痕跡しかみとめられず、多量の遺物の捨て場や複雑な遺構の重複関係は石狩低地帯をのぞいてみられないという事実は、定住性が相対的に低かった可能性をしめしているように思われる。このような移動性の高い生活スタイルは、以下のような資源利用の観点からも今後検討に値すると考えられる。

第1は、食糧資源の季節変動である。石狩低地帯に集中する遺構数・遺物量は、そこに相対的に多くの人口が集中していたことをしめしている。この地域の出土動物骨は、比較的規模の小さな遺跡ではエゾシカが多いこともあるが、大規模な遺跡ではサケ科が主となる遺構が多数ふくまれていた。相対的に大きな集団が、秋に特定の場所・地区でサケ漁とその加工に従事していた状況を考えざるをえない。

だが、冬季には利用できる植物の少なさや小雪地帯へのエゾシカの移動も考慮すると、石狩低地帯北部でおこなうことができる生産活動はきわめて限定される。そのかわり、晩秋から翌年の夏まで小規模な集団が他地域に分散することで、沿岸部における水産資源の捕獲や小雪地帯における狩猟などが可能となり、石狩低地帯に大人数がとどまるよりもはるかに効率的に北海道島内の資源を利用できる。

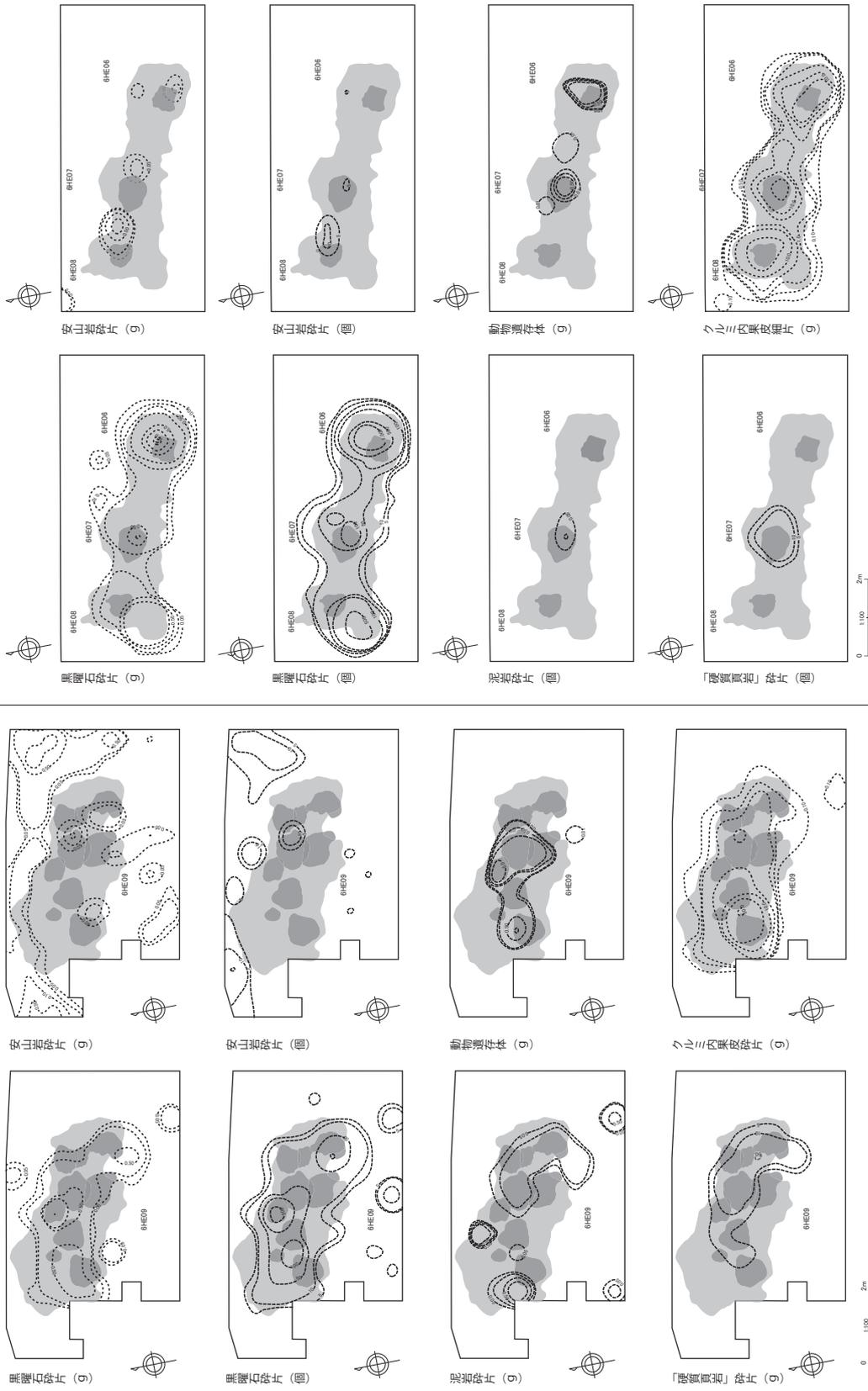
第2は、物資交換の必要性である。交換によって必要な財を入手するために、本州島から人がやってくる場合もあったであろうが、弥生文化後期の土器や4～6世紀段階の土師器の出土量から考えてこうしたケースはむしろ少数派で、多量の物資を運搬して北海道島から本州島へと赴くことのほうが圧倒的に多かったと考えるべきであろう。だとすれば、橇を使うことができる冬季こそ物資の長距離運搬にとって重要な期間だったはずで、秋以外に石狩低地帯にとどまる理由は見いだしがたい。

残念ながら、現在のところ、続縄文文化期の橇を立証できる物的証拠はない。橇はすべて有機質

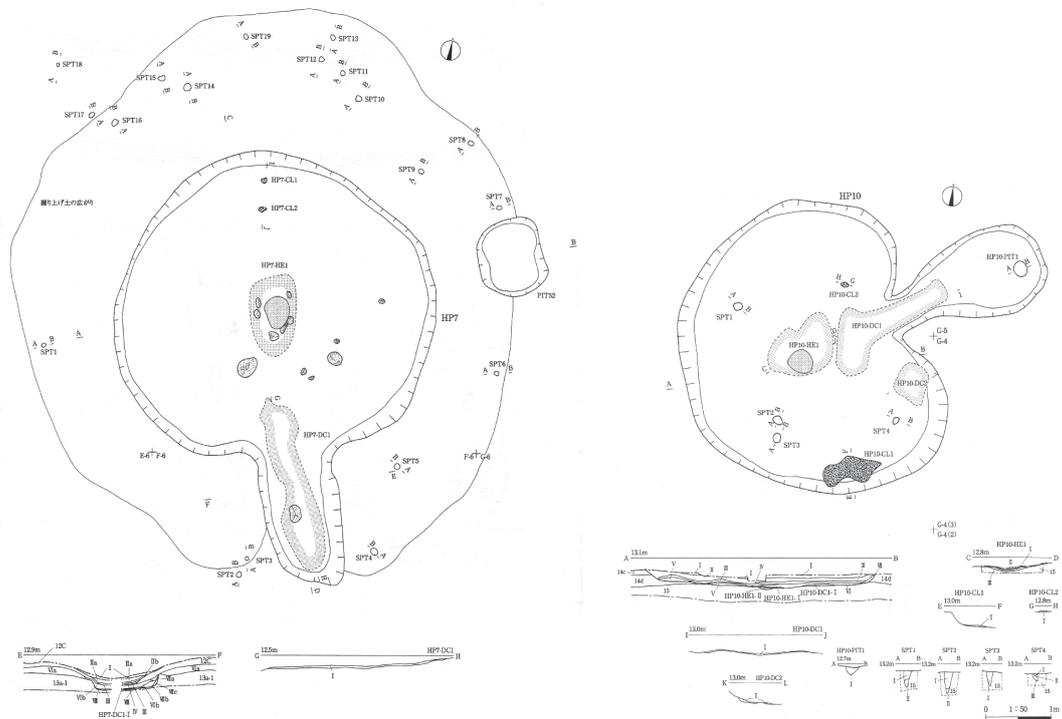


第9図 K514遺跡における出土遺物等量線図(1)

[石井・出穂・上野(2004)掲載図面(カラー印刷)のデジタルデータを
石井淳氏から高瀬が提供をうけ、モノクロ印刷に改変・縮小して作成]



第10図 K514遺跡における出土遺物等量線図(2)
 [石井・出穂・上野(2004)掲載図面(カラー印刷)のデジタルデータを
 石井淳氏から高瀬が提供をうけ、モノクロ印刷用に改変・縮小して作成]



第11図 K39 遺跡で検出された竪穴住居跡 [小杉ほか (2004) をもとに作成]

の材料で製作することが可能で、道具も刀子と鉄斧があれば十分に製作が可能である。革製の紐の生産・利用も間接的な証拠にはなるかもしれないが、必ずしも橇に特化した材料ではない。それでもなお、橇の利用は縄文文化の生業・居住形態とむすびつきわめて重要な物質文化であるため、部材の検出が待たれるところである。また、橇の動力になった可能性もあるイヌの出土例もきわめて少なく、縄文後半期では K135 で 3.6g の骨片が出土しているのみである。縄文前半期の出土例も南有珠 6 で 15 個、恵山貝塚 (2003-2004 年調査) で 2 個の出土にとどまっており、縄文文化期の出土例のほうがはるかに多い。死体の処理方法や食肉の慣習の有無ともかわるであろうが、とくに後半期のイヌ遺体は橇との関連でも今後注視していく必要がある。

今後検証すべき部分も多く残されていることは否定できないが、以上のような理由から筆者は、簡便な居住施設がどのような地域でも用いられ続けたことと移動性の高さは結びつく可能性があるとの見通しをもつにいたっている。

(4) 集団の移動範囲

移動性の高い生活を送っていた集団を想定するもうひとつの理由は、後北 C₂-D 式のひろい分布が維持される背景の説明が容易になるからである。そのいっぽうで、器面上における文様の割り付け原理の相違のような製作技術上の地域差 [熊木 2001] は、定住性の高低を判断する材料にもなるであろうし、集団の移動範囲や系統性を考えるうえでも貴重な情報となる。こうした点にアプローチできる研究材料はいまのところ土器をおいてほかになく、製作技術の微細なちがいは重要な着目点になると予想されてきている [松田 2005]。ここでは、製作技術をもとにおおまかな地域性の範

囲を見いだしてみたい。

道央部では、後北 C₂-D 式の多くの個体が、以下の原則につらぬかれて製作されている。

- 1) 縄文 (j) は長条縄文である。
- 2) 縄文 (j) の側縁からおおよそ 3mm 以内の近接した位置に、対となる微隆起線文 (b) が付される。
- 3) 微隆起線文 (b) の端部は単独で終了することなく、他の微隆起線文 (b) や隆起線文 (r) に接続する。
- 4) 微隆起線文 (b) は、文様構成を無視するような不自然な格好で地紋の条を横断しない（地紋の条を横断して微隆起線文が施されない）。
- 5) 列点・キザミの平面形は三角形を基本とする。

このような施文技術上の特徴を有する土器を、C 型（中央部型）と仮称しておく。

いっぽうで、道東部のオホーツク海側では、上記の原則から外れるものが多く見受けられる。長条縄文になっていない部分があるもの（第 14 図 2）、対になる微隆起線文と縄文が 3mm 以上はなれているもの（第 12 図 2、第 13 図 1～3、第 14 図 1・2・4・5）、微隆起線文の端部が単独で終了しているもの（第 12 図 2、第 13 図 1・2、第 14 図 1・2・4・5）、微隆起線文が不規則な追い込み・充填によって地紋の条を横断するもの（地紋の条を横断して微隆起線文が施されないもの）（第 12 図 3、第 13 図 2）、列点・キザミの平面形が三角形になっていないもの（第 14 図 3）などが高い確率でみとめられる。

上記のように C 型の原則から外れる特徴を持つ個体群を便宜的に E 型（東部型）と分類しておく。図示した資料は後北 C₂-D 式のなかでも新しい時期の資料が多いが、道東部において E 型は後北 C₂-D 式の幅広い時間幅において存在しているようである。報告書に図面が掲載されている個体の計数結果によると、札幌市 K135 遺跡では 9 割以上が C 型であるのに対して、斜里町オシャマップ川、北見市栄浦第一・二では対照的に 9 割以上が E 型である。

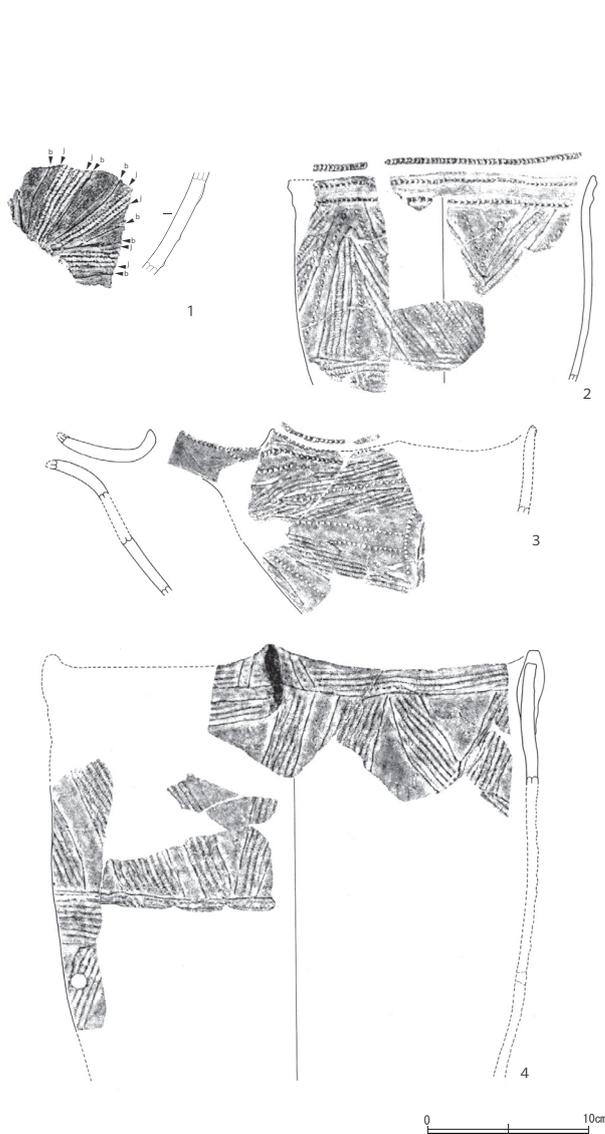
千島列島の状況はまとまった数の資料の検討ができていないため詳細は不明だが、第 15 図 3・4 のように C 型もあるものの、E 型も無視できない割合で存在していると予測される。たとえば、第 15 図 1 には地紋が長条縄文になっていない箇所がある、第 15 図 2 では微隆起線文が縄文を切るあるいは微隆起線文の端部が他の文様要素に接続することなく途切れ、第 15 図 5 では縄文と微隆起線文の間隔が 4mm 以上あき、第 15 図 6 では列点の平面形が三角形ではなく線状、といった具合である。また、古くから知られているように、色丹島では微隆起線が沈線に置き換わった千島列島特有の標本も認められる。道東部の太平洋側の状況は、資料数が少ないため状況はさらに不透明である。

C 型と E 型の比率からは、大きく道央部と道東部オホーツク海側の製作者集団の違いが考えられよう。当時、移動性が高い集団がいたとすれば、集団は相互にのりいれは可能であったものの、北海道島はすくなくとも 2 つのブロックに分かれておもな移動範囲が設定されていた可能性がでてくる。道南部の土器は E 型ではなく C 型に類似するものが多いが、将来的に地域差が見いだせるのであればこのブロック数はさらに増えるかもしれない。いずれにせよ、こうした地域差が移動領域をある程度反映しているとすれば、数百 km 四方の広域な空間範囲を想定しなければならないこととなる。逆に、当時の定住性がきわめて高かった場合は、こうした空間範囲には移動とはべつ

意味づけが必要になる。

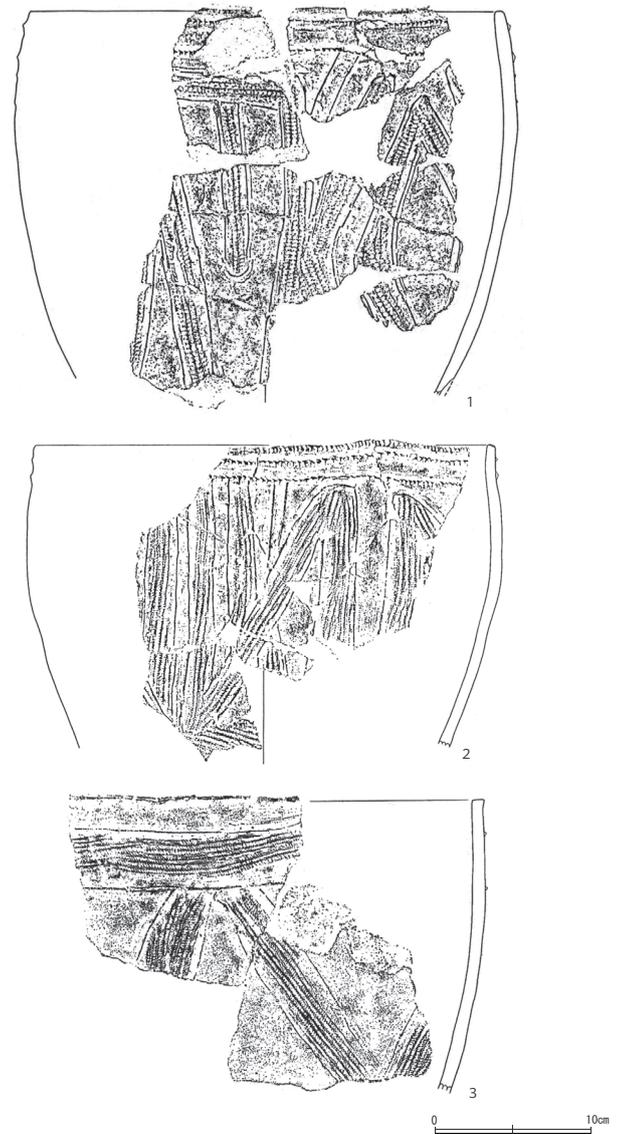
本州島東北部の出土土器は墓をのぞくと細片が多いため検討は必ずしも容易ではないが、ほとんどがC型（およびそれに類似するもの）と考えられ、少なくともE型がまとまって出土している事例はない。したがって、津軽海峡を渡った人々はC型の主たる分布圏を拠点とする集団であると推定される。井上 [1995] は、岩手県仏沢 III 遺跡・大石渡遺跡出土土器のうち、形態にはとくに大きな差がない後北 C₂-D 式に海綿骨針を含むものと含まないものの二者があること、また海綿骨針は北上川西岸にはしる飯岡層に由来する可能性を指摘している。海綿骨針が混和材のような文化的要素というよりは粘土採取地・土器製作地を直接しめすという前提にたてば、北上川流域で製作された後北 C₂-D 式が存在する可能性は高い。

石巻市新金沼遺跡出土土器の胎土分析によっても、土師器と続縄文土器のあいだの類似性がみい



第12図 湧別・栄浦第二遺跡出土土器

[1: 湧別, 筆者実測, 2-4: 栄浦第二, 武田編 (1995) をもとに作成]



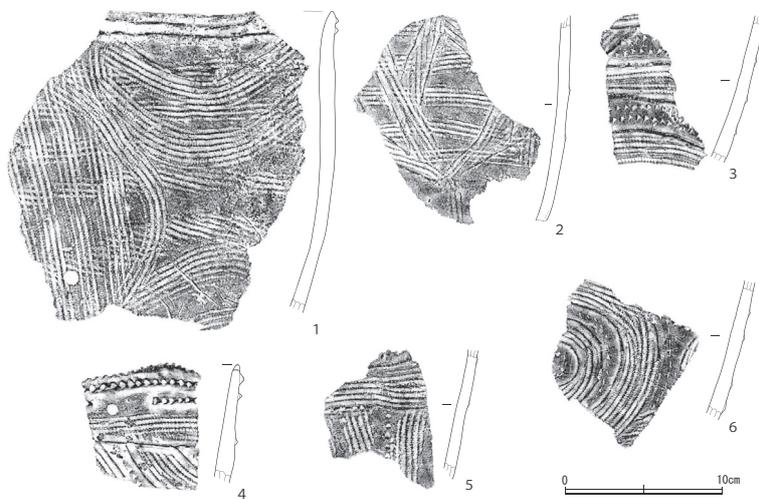
第13図 トコロチャシ跡遺跡出土土器(1)

[今村ほか (2001) をもとに作成]

だされている [井上 2003]。移動先で土器製作を行ったのか、本州島に滞留する集団が製作したのかはまだ特定できないが、少なくとも本州島でC型の製作集団が関与して土器の製作が行われたと考えることはできる。本州島東北部出土土器を評価するためには、今後、道南部との詳細な比較も必要である。この地域では、後北C₁式までは道央部などとの地域差がみとめられるが [大坂 2011]、後北C₂-D式期にはC型が圧倒的の多数になるとの見通しをもっている。だが、資料数が必ずしも多くはないため、破片が少数のみ出土する遺跡もふくめて確認していく必要がある。



第 14 図 オシャマツ川遺跡出土土器 [松田編 (1995) をもとに作成]



第 15 図 千島列島出土土器

[すべて南千島出土、北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園保管資料、筆者実測]

(5) 儀礼体系の問題

ここまでみてきた資源利用や居住形態の変化は、儀礼体系にも何らかの影響をあたえたはずである。縄文・弥生文化との比較という意味でも有効な論点であるため、筆者の展望についてふれておきたい。前半期から一貫してみられる続縄文の特徴は2点ある。ひとつは、葬送儀礼における副葬品の増加や副葬率の急激なたかまりである〔瀬川 1983, 青野 1999a〕。石狩低地帯北部で管玉を多く出土する墓坑には、かなりの確率であまり一般的ではない磨消縄文や沈線・縄線による鋸歯文がほどこされた土器が出土する（第8図）。時期によっては副葬用に特別な意味をもっていた土器がありそうなので、土器と副葬品の関係も今後の重要な検討項目となりそうである。

もうひとつの特徴は、土偶および土偶祭祀の欠如である。続縄文文化の人々は、石製・骨製のクマや少数の岩偶以外に土偶をはじめとするポータブルな偶像をほとんどもたない点は、縄文や本州島東北部の弥生文化との大きな違いである。この点は、フゴッペ・手宮洞窟のように偶像を埋め込んだ儀礼の場の出現と表裏の関係にある可能性を指摘しておきたい。出土エゾアワビの産卵・冬期障害輪からみたフゴッペ洞窟のおもな利用季節は、春と秋である〔右代 2011〕。捕獲に適した夏が抜けおちているのは、産卵期直前のためあえて利用していなかった可能性と、夏期には人がいなかった可能性が想定できる。後者がなりたつ場合には、石狩低地帯にもっとも集中する秋とその直後に儀礼目的で利用された可能性が考慮できる。今後、動物遺体全体の詳細な再検討にもとづく季節性の推定が必要であるが、夏が抜け落ちていることが重要な意味をもつであろう。

ただし、こうした刻線画をともなう洞窟遺跡はかなり特殊な存在でもあるので、ポータブルな偶像をもちいた儀礼がこのような遺跡だけに置き換わったわけでもないであろう。たとえば、石狩低地帯の内部には墓地という巨大な儀礼センターがいくつもあるし、青森市小牧野〔青森市教育委員会 1996, 青野 2005〕や森町鷺ノ木遺跡〔森町教育委員会 2008〕のような地表に露出した過去の記念物のある場所も、洞窟遺跡と同様の性格をもっていた場かもしれない。当時の交易ルート・移動経路をさぐる目的だけではなく、儀礼や集団紐帯の維持という観点からもこうした遺跡を見直す必要がある。

④……………本州島東北部との関係

(1) 東北北部の地域構成と北海道島との交渉

東北北部の人々が弥生前期後半に水稲耕作をはじめた要因には、まだ未解決の部分が数多くのこされている。縄文晩期社会が食料獲得のうえで危機をかかえていたことを示す証拠はないが、筆者は初期の穀物生産の開始は人口の増加や食料不足のような社会に対する外的な要因だけではなく、社会組織の変化や社会的不平等の発生など社会内部にあるというアイデア〔Bender 1978, 1990, Hayden 1990〕が適用できる可能性を考えている〔高瀬 2004〕。

ただし、本州島東北部における弥生文化の内情はやや複雑である点に、注意が必要である。というのは、どこでも稲作が行われていたわけではなく、稲作を積極的に行っていたのは平野部だけで

あったことが近年の研究で明らかになってきたからである。いまのところ比較的豊富な稲作関連資料がそろっているのは津軽平野だけであるが、それ以外にも馬淵川・新井田川下流域、男鹿半島周辺、秋田平野でも、津軽平野と同程度の規模で集中的に稲作が行われていた可能性がある [高瀬 2004, 2009, 2012b]。筆者は、稲作を中心とした生業と平野部の土地利用によって特徴づけられるこうした地域を「A 地域」とよんだ [高瀬 2011d, 2012a]。これに対し、たとえば下北半島・津軽半島のように、稲作以外の生業と非平野部の土地利用によって特徴づけられる地域を「B 地域」として区分した。パッチ状に分布する A 地域と B 地域が物資の流通・儀礼行為の面で比較的強固に結びついて地域社会を構成している点に、本州島東北部の弥生社会のひとつの特色をみいだしている。

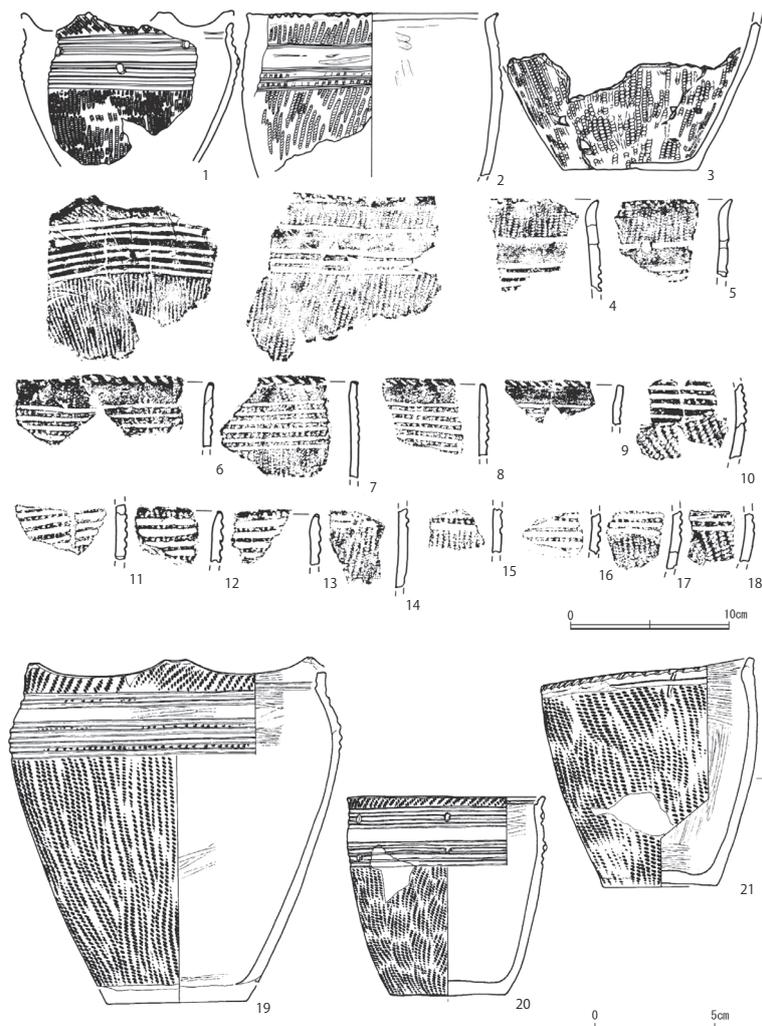
穀物が A 地域から B 地域へ移動した事実を考古学的に証明することは非常に難しいが、下北半島では少量の粘土器が存在することがかねてから知られてきた [伊東 1967, 1968, 1970 など]。下北半島では稲作の明確な証拠は皆無であるため [高瀬 2011d, 高瀬編 2012]、A 地域からイネが移入されていた可能性が高いと考えられる。比較的大型の甕・壺を蔵骨器としてもちいる墓制や住居の規模・構築方法は、A・B 地域を通じて一定の共通性が認められる。弥生前期並行のデータは少ないものの、中期前半並行段階の北海道島までを視野に入れて比較すると、住居のプランや構築方法、墓の構造や副葬・供献品の様相は、やはり津軽海峡を境にして相違点が大きかったと理解される。

土器や石器は、しばしば津軽海峡をこえて移動し、また影響を与えあっていることはたしかである。だが、北海道島における漁労具の発達や、遺跡の立地の偏向性をみると、さきにみたような漁労・狩猟がしめる社会的役割は食料獲得という面でも、個人の威信獲得という意味でも、津軽・下北半島以南とはかなり異なっていたといわざるをえない。また、北海道島では A 地域が欠落している点も、決定的な違いである。北海道島でも、将来的に本州島東北部から搬入されたイネや雑穀が検出される可能性は十分にあり、国立療養所裏遺跡 [石本ほか 2000] のように本州島との近縁性の高い遺物がまとまって出土する遺跡では (第 16 図)、とくにその可能性を念頭においた調査・検討も必要である。だが、これまでの出土炭化種子や粘土器の検討結果は、本州島東北部と北海道島のあいだに横たわる穀物利用の違いは非常に大きいことを示しており [高瀬 2007a, 2007b, 2010b, 2010c, 2011b, 2012b, Takase 2011]、津軽平野南部のような集約的で大規模な稲作を行っていた可能性を考慮する必要は現時点ではまったくない。稲作を積極的に行い、鉄器の供給能力をもつ社会と接触し、物資のうえで相互依存的な関係を構築した事例は縄文文化にはみられず、続縄文文化がはじめてである。

ところで、北海道島の住民が、弥生文化前半段階の本州島と交流する際には、A 地域と直接交渉するのではなく B 地域をおもな窓口としていた可能性が濃厚である。「全て砂沢式の類型に包括されるもので、器形・文様要素において逸脱するところのものはない」 [石本ほか 2000, p.475] との発言から読み取ることができるとおり、先述の国立療養所裏遺跡から出土した砂沢式は 非大洞系のながれをくむ土器 (第 16 図) が圧倒的多数をしめるこの時期の渡島半島部においては異例なほど本州島東北部との関係がつよい [佐藤 2006]。しかしながら、この土器群は、次のような理由から津軽平野や八戸周辺の A 地域に相当する地域の砂沢式ではない。1) 口唇部にキザミをもつものが多い、2) 頸部に幅の狭い無文帯をもつものが多い、3) 精製浅鉢・半精製の鉢、粗製の深鍋を中心とした器種組成で精製の台付浅鉢や蓋を欠く。これらの特徴は、下北・津軽半島部とのつながり

がつよいことをしめしている。

近年、筆者らによる青森県むつ市江豚沢遺跡の調査研究〔高瀬編 2012〕および大坂〔2009〕・桜井〔2009〕による青森県域の基準資料の再整理により、縄文終末期から弥生前期にかけての下北半島の土器の詳細があきらかになってきている。それによると、大洞 A' 式期までは本州島東北部の他地域との類似性が非常に高いが、砂沢式並行になると半精製・粗製土器の比率が他地域に比して非常に高くなり、これらの口唇部には頻繁にキザミが付されることが明確になってきた（第16図）。また、頸部にせまい無文帯をもつ半精製鉢は、下北半島にも数多く存在していることが確認されつつある。かつて筆者は、この種の土器は二枚橋式成立のために欠かせない要素であるが、砂沢式並行期の下北半島にはほとんど分布しておらず、津軽平野の砂沢式に少数みられることを指摘した〔高瀬 2005〕。だが、その後の調査で、下北半島でも砂沢式並行期から安定してみられることが明らかになってきたことから（第16図 19・20）、この地域内でのスムーズなつながりを想定できるようになった。さらに、資料がふえた現在でもなお、下北半島では精製の台付鉢や蓋が津軽平野ほど安定的に



第16図 国立療養所裏遺跡 (1-18)・江豚沢遺跡 (19-21) 出土土器
〔石本ほか (2000), 高瀬編 (2012) をもとに作成〕

存在する状況はみとめられない。したがって、国立療養所裏出土土器は A 地域ではなく B 地域からの影響もしくは人の移動によって理解されるべきと考える。

つぎの弥生文化中期初頭には、とくにその新しい段階において、奥尻島をのぞく渡島半島全域へと二枚橋式が拡散する。前段階の砂沢式期にくらべるとその影響力は非常にたかく、結節沈線文や波状文・刺突文を組合せた文様モチーフのような要素もふくめると、油駒・幣舞・声間など北海道島のほぼ全域におよんでいる。また、道南部においては土器の系統そのものが、非大洞系から大洞系に交替し、恵山式が成立する。しかし、土器の製作技術からは、多くが在地の土器製作者をまきこんだ物質文化の変化であると考えられる [高瀬 1998]。下北半島からの集団の移住・往来も否定できないとはいえ、それだけで北海道島における二枚橋式の増加・拡散を説明することは難しい。

二枚橋式期から恵山式終末期にかけて本州東北部との交渉が確認される資料があるが、A 地域からの搬入品として理解できるもの、たとえば津軽平野と胎土・製作技術・焼成が共通する五所式・井沢式・田舎館 2 群・3 群の北海道島への搬入品と判断できるものはない。伊達市オヤコツ (旧南有珠 7) 遺跡出土の田舎館 3 群無頸壺は [峰山・大島・瀬川 1984]、サイズが大きく、胴下半部が深鉢のように長くなる点で津軽平野とはことになっており、A 地域からの搬入を示す証左とはなりえない。下北半島では類例はないが、近年、津軽半島の中泊町坊主沢で田舎館式 3 群に類似する土器が製作されていることがわかってきているので、やはり B 地域からの搬入品もしくは製作者の移動の結果と考えられよう。

このほか、札幌市 H37 (丘珠空港地点) [羽賀編 1996] の砂沢式が A 地域と B 地域の双方の可能性が考えられるほかは、瀬棚南川の二枚橋式 [須藤 1998]、小幌洞窟の字鉄 II 式 [北大解剖学教室調査団 1963] などいずれも B 地域からもたらされたものである。札幌市 H37 (栄町地点) [秋山編 1998] 出土の二枚橋式は口縁部の開きが弱いことや、文様に縄の側面圧痕が用いられていることからみて、明らかに北海道島内で作られた模倣品である。続縄文前半期の北海道島は、B 地域を介在させて本州島東北部との交渉をおこなっていた公算が大きい。

このように考えると、前半期続縄文文化の担い手は、A 地域の産物であるイネなどの穀物に強い関心をもっていた可能性はほとんどないとみてよい。これに対して、本州島東北部内ではさきに見たように、B 地域の下北半島で在地製作の二枚橋式に靱圧痕土器が検出されているので、A 地域から B 地域への穀物の移動はあったと考えられる。また、垂柳遺跡出土土器や木製品にみられるクマ意匠が稲作と続縄文的要素の奇妙な同居例としてしばしば紹介されるが [藤尾 2011 など]、江豚沢遺跡の調査からクマ意匠は A 地域ではなく B 地域でも非常に多いこともわかってきている [高瀬編 2012]。A 地域でみられる続縄文的な要素は、じつは北海道島との関係を想定しなければ説明できないと考える特段の理由があるわけではなく、すべて日常的な人的・物的往来があったと思われる B 地域からの影響を考えるだけで十分なものばかりである。

続縄文文化の人々のあいだで需要が高かった管玉・貝製装身具・イノシシの牙 (製品)・赤色顔料の原料といった非実用品は、基本的には B 地域を介して入手していたのであろう。この対価が、黒曜石、緑泥石片岩、魚・海獣を中心とする動物質食料、魚類・哺乳類の皮革などであったと考えることができる。

(2) 東北北部のカタストロフィー

A 地域では、弥生中期中葉に大きな出来事が生じる。大規模な洪水によって平野部の水田が埋没する被害を被ると、水田は復旧されることなく放棄され、平野部から遺跡がほとんどなくなってしまふ。これは、津軽平野の資料にもとづいた理解であるため、たとえば馬淵川下流域や秋田平野にも同じ理解が成り立つかどうかはまだ確証があるわけではない。ただし、中期前葉にくらべると、中期中葉から後葉にかけて遺跡数・遺物の出土量は減少する傾向はどこでも共通しており、すべてが同じ自然災害による影響かどうかは不明としても、平野部で人口が急速に減じたり、稲作が不調をきたした可能性がきわめて高い。そして、東北北部では、人口密度が極端に低い状況が弥生文化後期並行期までつづく。

青森県域は、前近代における水稲耕作の北限である。自然災害への耐性の低さと、低生産性ゆえに容易に農耕を止めてしまう現象は、農耕分布限界付近では決して特殊な現象ではない。その最初のエピソードが、上記の弥生文化中期中葉のカタストロフィーである。

津軽平野を典型例として把握することができる中期中葉の稲作と地域社会の挫折は、それまでの社会を一変させた。稲作が停止されるだけでなく、A 地域の消滅によって A・B 地域がむすびついた地域構成が崩壊する。この地域の弥生文化の特徴であった A・B 地域の複合が途絶えることから、弥生文化はここで終焉をむかえると考えるのが妥当であろう。従来の B 地域の物質文化は以後、北海道島と類似するようになる。厳密には資源利用の内容を吟味しなければならないが、沿岸部にかたよる遺跡の分布状況からみて現時点では続縄文文化にふくめることができると推定しておきたい。秋田・岩手県域の弥生中期後半並行期の生業にかかわるデータがさらに充実すれば、この段階の弥生文化と続縄文文化のあらたな境界を議論することもできるようになるはずである。

かつての A 地域で稲作を行っていた人々がどこにいったのかは、いまもって不明である。下北半島で弥生中期後葉の遺跡がそれ以前にくらべて増える傾向が看取されているように [齋藤・福田 2003, 高瀬編 2012], ひとつの可能性として B 地域への移住をあげることができる。しかし、A 地域に特有であった系列の土器が B 地域で共存しはじめるなどの現象は確認されておらず、また遺跡数の増加といっても激増といえる状況ではない。もうひとつ注目すべき現象として、青森・秋田県域の土器の文様要素・文様帯構成が、恵山式に非常に類似してくる点があげられる。しかし、そこにかつての A 地域の要素(たとえば田舎館 3 群の要素)が混在している形跡はやはりほとんどない。同様に、北海道島や東北中・南部への移住をしめす証拠もないため、津軽平野の人々の足跡には不明な部分が多く、あるいは自然災害によって多くの死者がでていたのかもしれない。

弥生文化後期並行期の東北北部の物質文化は、北海道島からの影響ではなく、本州島東北部内部の伝統で説明がつく。稲作が再開されたことをしめす明確な証拠はないが、漁労につよく依存している証拠もない。中期後葉に一時的に続縄文的になったものの、ここでふたたび東北北部独自の物質文化と経済基盤によって特徴づけられるべつの考古学的統合体を設定する必要がある。筆者自身も最善の案とは思わないが、ひとまず「赤穴系文化」と仮称しておきたい。

古墳文化並行期には、土師器の影響を強く受けた考古学的文化が認められる。前方後円墳を最大の指標として括られている文化グループもしくはテクノコンプレックス以上の考古学的統合体とし

ての古墳文化の北限は、太平洋側では岩手県南部～宮城県域、日本海側では山形県域内においてゆれうごく。前方後円墳を指標とする以上、その分布域の変化は時期ごとに忠実にとらえる必要がある。しかしながら、古墳の分布域からはずれてもそれに隣接する区域では、古墳文化と非常に共通性が高い物質文化が継続して認められることが知られている。橋本 [2012] が「C 地域」と分類する、おもに岩手・秋田・青森県域にみとめられるこうした古墳非築造地域の考古学的統合体の規定は難しい問題であるが、ひとまず「古墳北縁文化」と仮称しておきたい。

(3) 雑居地帯としての東北北部

東北北部において後北 C₁ 式～北大式が出土する期間は、「赤穴系文化」、すなわち後期の弥生土器とされてきた土器を中心とする物質文化複合と、「古墳北縁文化」、すなわち土師器を中心とする物質文化複合と同一遺跡のなかで共存することが普通である。ここで注目すべきは、物質文化の遺跡内における共存はありえても、折衷や融合化がほとんど進行しない点である。後北・北大文化と「赤穴・古墳北縁文化」それぞれの自立的な製作と変化が、数値年代から推して少なくとも 200 年以上維持されているのである。

藤本 [1988] は、本州島東北部～道南部を「北の文化」と「中の文化」の「『ボカシ』の地帯」とよんだ。「北の文化」と「中の文化」の境界は明確に一つの線で区切ることができず、「『ボカシ』の地帯」として存在している。その範囲のなかで文化要素を個別にみると、あるものはより北に限界があるが、あるものはより南に境界がある。藤本 [1988] のいう「北の文化」「中の文化」は考古学の範疇を超えたより汎用性のある文化論とみるべきであるが、考古学的な議論のために、ここでは文化グループやテクノコンプレックス以上のまとまりと理解しておく。それらのバウンダリーは、線としてではなく「地帯」として把握すべきであるという着想にもとづいているのが「『ボカシ』の地帯」概念であり、その具体的な地域として東北北部～渡島半島と、九州島南部～薩南諸島があげられている。これに類似した見解は、小杉 [2011b] によっても提起されている。

ここで注意しなければならないのは、「『ボカシ』の地帯」や境界帯と表現するだけでは、その地域の具体的な歴史的状況を説明したことにはならない点である。つまり、異なる文化（ここでは文化グループやテクノコンプレックス以上の水準の考古学的統合体をさす）にはさまれた地域であるがゆえに、1) 個人や集団のなかに異文化の要素が混ざり合ってそれ自体ひとつの地域色を形成していた、2) 時間・空間によって異なる文化の境界がはげしく変動していた、3) 全く異なる文化をもった個人・集団がせまい範囲に共存していた、などさまざまな状況が考えられるからである。このうち、どの状況が実際に生じていたのかを明らかにできなければ、どっちつかずの単なる「漸移帯」としての意味をこえて「『ボカシ』の地帯」概念が歴史学のなかで意味をもつことはないだろう。

筆者は、後北・北大文化と「赤穴系・古墳北縁文化」の物質文化が同一遺跡内で共存することが一般的となる東北北部の状況を、異なる文化伝統をもつ人々の混在状態として評価すべきと考える。地域ごとに文化伝統を異にする集団が住みわけるのではなく、非常に狭い範囲や同じ集落においても混在して居住する。そして、個人・集団レベルでは物質文化の融合・変化をほとんど生じさせないまま異なる考古学的文化が混在・併存する状況が、短く見積もって 3 世紀から 5 世紀の約 200 年間、長く見積もって 2 世紀から 7 世紀の約 500 年あまりにわたって継続したことに注目しな

ければならない⁽¹⁴⁾。続縄文文化後半期および古墳時代並行期の東北北部を文化の遷移帯や接点として評価するのは適切ではなく、異なる考古学的文化を担った集団の雑居地帯 (Mixed residential area, Mixed residential quarter) と理解するほうが実態をより反映している。

おなじような状況は、東北中部においても生じていた可能性がある。宮城県石巻市新金沼遺跡の事例は、「異なる文化を持ったものが同一集落内で共存していたと思われる」[芳賀ほか 2003, p.123]と評価されている。ただし、この場合はあくまでも集落単位での局所的なケースであり、こうした集落が周囲にいくつもみられるわけではない。雑居地帯の範囲はあくまでも、青森・岩手・秋田県域でなおかつ前方後円墳分布域の北側としておくのが妥当であろう。

こうした雑居状態は、土器・墓などの遺構とともに、動物資源の加工痕跡にも垣間みることができる。続縄文後半に特徴的な黒曜石製の円形スクレイパーは、東北北部でもみとめられ、これらはおもに皮革加工に用いられていたことが明らかになっている [御堂島 1986, 1993, 須藤・高橋 1997, 高橋 1998, 2005, 高瀬 2002a, 2008, 2011a, 高瀬・丸山 2003]。中半入など前方後円墳に至近の集落遺跡でも特定の堅穴住居跡から多量に出土しているほか、「古墳北縁文化」の圏内でも決してめずらしい道具ではない。

黒曜石が元来有している物的な特性は、独特の光沢と色調、人間の石器製作にとっての割れの制御のしやすさ、および剥片縁辺の鋭利性である。スクレイパーはこれらの特性を活かした利用法ではないにもかかわらず黒曜石製石器の使用が継続するのは、当時の社会における文化的な価値が多分に作用していたためと考えるほかない。北海道島産の動物皮そのものや、続縄文文化の技術や人々によって加工された皮革に高い社会的価値を見いだしていた古墳文化圏の事情が絡んでいるにちがいない。その需要をみたすために「古墳北縁文化」内でも黒曜石製石器による皮革加工が行われており、場合によってはその技術を身につけた人物・集団が古墳文化圏内に招来される、あるいは交易のために一時的に入り込むなどしていたと考えられる。それゆえに、古墳文化圏内でも少数ながらこうした石器が出土し、一見すると雑居状態と思えるような状況も目にすることができるのである。

ここまでみてきたように、続縄文文化は、物質文化の系統、縄文の使用、狩猟採集経済の枠組み、石器の製作技術などにおいては縄文文化との共通性がたかい。だが、それぞれの地域・時期の方式で漁労への傾斜を強めたほか、A 地域を含まない地域社会の形成、利器の外部依存、移動性の高い居住形態、鉄器の交換・利用など、縄文や弥生とはことなる社会経済的な特徴もみとめられた。こうした点から、現時点ですぐに縄文文化のなかにふくめてしまう必然性はないと考えられる。

東北北部は、カタストロフィー後 (弥生中期後半並行期) に一時的に続縄文文化圏にふくまれる。だが、北海道島の集団が進出する時期 (弥生後期～古墳文化並行期) には、弥生土器とされる土器や土師器を使用する集団との雑居状態となっていたこと自体をひとつの歴史的状況として評価する必要がある。この時期の東北北部は続縄文文化一色で塗りつぶすことはできず、異なる考古学的文化との雑居状態が数百年間継続する点が重要なのである。こうした評価を、東北北部の歴史年表にどのように表現するのか、具体的な検討が必要な段階に入ってきているといえるであろう。

おわりに

本稿では、続縄文文化が隣接諸文化と異なる側面を多数もちあわせている点を確認してきた。資料の少なさや筆者の力不足により十分な論証ができず仮説の提示におわっている論点も少なくないが、文化・時代概念の問題、続縄文前半期の生業の問題、後半期の交換や居住形態、本州島東北部の弥生文化との関係について筆者なりに整理し、議論の精緻化の足がかりを形成することができた。今後は、本稿で指摘した個別の問題について、さらに踏み込んだ検証を行っていききたい。

最後に、本稿で筆者が提示したような続縄文文化像とその歴史が将来的に成功裡に描かれたとしても、それが一足飛びに古代蝦夷・中世蝦夷やアイヌの形成過程の解明につながるわけではない点を強調しておきたい。本稿ではほとんど検討できなかったが、古墳文化、擦文文化・オホーツク文化、および考古学的にアプローチが難しいアイヌ文化期における複雑な歴史的過程をへて、アイヌ文化のひとつの典型として知られている近世並行期のアイヌ文化とようやく接点を見いだすことができるのである。続縄文文化の検討は、そのための第一歩にすぎず、埋めるべき歴史はまだ途方もなく多くのこざれているのである。

【謝辞】

本稿の執筆にあたって、下記の方々にお世話になった。記して感謝申し上げる（敬称略、五十音順）。安藤広道、青野友哉、石井 淳、石川日出志、石本省三、上野祥史、右代啓視、大坂 拓、大島直行、小椋純一、加藤 克、岸本直文、木村英明、熊木俊朗、小杉 康、小林謙一、小林青樹、設楽博己、鈴木 信、仙庭伸久、高倉 純、高橋 毅、堤田はるえ、椿坂恭代、西脇対名夫、野島 永、野村祐一、広瀬和雄、福田正宏、藤尾慎一郎、藤沢 敦、松木武彦、松田宏介、山田康弘、李 亨源。

註

(1)——逆に、オホーツク文化やアイヌ文化がオホーツク時代やアイヌ時代と言い換えられることがないのは、その考古資料をのこした主体が前後の時代や周囲の考古資料をのこした主体と同一性があるかどうか分からないためである〔西脇 2010〕。より突き詰めていけば、北海道島でさえも、和人もしくはそれに直接連なる集団でなければ時代を形成してはならないという、偏った基準が日本考古学のなかに横たわっているのである。

(2)——たとえば、「岩宿時代の場合には、もっぱら石器の組合せだけで考えるが、縄紋時代になれば、土器や石器や骨角器や住居の構造などを含めて「文化」をとらえることになる。これは文化人類学で言う文化の概念とほぼ共通している」〔佐原 1992, p.50〕という説明は、あらゆる人が考古学に誤解をいだく内容であろう。

(3)——文化概念の重視によって、かつてニューアーケ

オロジーが批判した文化史のアプローチ〔Trigger 1989 など〕に堕してしまうとの心配もあるかもしれない。だが、考古学的文化を研究の基礎におくことと文化史のアプローチをとることはまったく別の問題である。生態論、資源利用論、行動論などを組み込んだ研究が数多く生み出されてきている現在、文化概念の重視によって文化史のアプローチで満足するような研究の方向性が強まるという懸念は不要であろう。むしろ問題なのは、考古学的文化をどのように設定し、どのように取り扱うのか、という方法論的側面にある。考古学的文化を重視することの最大のメリットである空間範囲の忠実な把握を遂行するための具体的な方法論は、現実的にはまだほとんど開発されていないからである。チャイルドの構想したコロロジカルな分布論をどのように実現し、“people”をいかにとらえるかが最大の課題なのであろう〔小杉

2011a]。この点は方法論としての分布論の未熟さを示すものであっても、考古学的文化を軽視してよい理由には決してならないことに留意する必要がある。

(4)——石器だけで文化を区分している時期と、その他の遺物を組み合わせて文化を区分している時期とでは、おそらく文化の精度だけではなく質そのものが異なる。この点はClarke [1968, p.334]も指摘している。なお、「多相配合」の理解は、林 [2004] にしたがった。

(5)——考古学的な文化区分も、一括遺物や型式の組合せの検討をへて設定されたものよりも、結論をやや先取りしたうえで範囲が確定されたり、特定型式が設定されたりしているのが実情であるから、新しいデータを利用して随時文化の内容を更新・再検討できるシステムが構築される必要がある。

(6)——管見のかぎり、1950年代には「統縄文期」[大場 1956]の表現があらわれているが、「統縄文文化」が1970年代まで支配的なタームであった[江坂 1957など]。しかし、80年代からは「統縄文時代」が目立つようになり、90年代以降は「文化」よりも明らかに「時代」が優勢となっている。西脇 [2010] は、「縄文」と「統縄文」が別個の時代であるという認識が普及した背景に、北海道教育委員会が1973年から採用した埋蔵文化財包蔵地調査カードの様式が関係していると推定している。

(7)——山内清男は、統縄文を土器の名称(統縄紋式)として用いはじめ、生涯この用法を逸脱することはない。統縄文文化や「統縄文時代」はおろか、「統縄文期」の語も使用しておらず、山内が作成に関わった「縄紋式」の編年表に「統縄文期」がはいったこともない。「統縄文式」には「細別数型式の推移が認められる」[山内 1964, p.145]と述べられているので、ここでいう「式」は細別型式を指し示すものではない。大別型式だとすれば、山内の用語の使用法から考えて、「統縄紋式」ではなく「統縄紋期」と表現されたはずであり、その可能性はないであろう。むしろ、「縄紋式」「弥生式」「オホーツク式」とおなじ水準の「式」概念であったとみなしうる。また、北海道島に分布していた晩期後葉の土器が「統縄文式」に移行すると表現されている点からみると[山内 1964, p. 145]、「統縄文式」は「縄文式」に後続する「式」であり、山内が「縄文式」の6つ目の大別として位置づけることを意図していたことを示す明確な証拠は筆者にはないと思われる。

(8)——このほかにも、日本列島史のなかにある「日本文化」と「大森(縄文)蝦夷アイヌ文化」の対立構造において、本州島東北部と北海道島をふくめて統縄文を「大

森(縄文)文化統期」とする立場もある[岡本 1991, 1994]。「弥生人と闘争した大森(縄文)人の復権」と「その闘争史」の一断面であり、「日本列島東部弥生文化」は「縄文(大森)文化」の系統を引く「統縄文」であるという。弥生文化の内部を稲作以外の指標で分けたり、北海道島や本州島をことなる指標で統合したりする発想そのものはあってもよい。だが、通時的に配列された考古学的文化間の系統性を強くみとめ、近現代の人間集団にまで直接むすびつけるには不明な部分が多すぎる。

(9)——札幌市 N295, K514 では魚類の組成率がとくに低い。前者ではフローテーション法が実施されていないため他の札幌市内出土遺跡と同列に比較することはできない。後者は、後北 B 式期末～C₁ 式期にかけてのきわめて短い時間幅のなかで形成されたキャンプサイトと考えられており[石井ほか 2004]、魚類の少なさは秋季以外に哺乳類の狩猟の場として利用されていた可能性を考えさせる。

(10)——かりに資源構造の内部があますところなく利用されているのであれば、「資源構造の全面的開発」(full exploitation of resource structure)、開発された資源を「全面開発された資源」(fully-exploited resource)といえることができるが、これはおもに近代以降に生じた現象である。統縄文もふくめ、先史時代の日本列島においては、「資源構造の全面的開発」の確実な事例はないと思われる。

(11)——道北・道東部では管玉にかわってコハク玉が主たる装身具として用いられるが、道南部および日本海側は管玉の分布域であるにもかかわらず貝製平玉も分布し、積極的に製作されている[右代ほか 2001]。筆者は、平玉が道南部や北海道島の日本海側の人々が他の地域の物資を入手するための交換財になっている可能性を指摘したが[高瀬 2010a]、そこでは本州島はもとより、北海道島内、とりわけ石狩低地帯との交換を意図しての製作も考慮に入れることができる。

(12)——狩猟採集民と農耕民の交換にかかわる民族誌においては、農耕民がつくった穀物と狩猟採集民の動物質資源が特定の世帯間のような小さな社会的単位間で交換されることが比較的広くみられ、時間的にもさかのぼると考えられている[Peterson 1978]。具体的なエピソードにまでは踏み込めないが、たとえば石狩低地帯の人物の本州島への遠征や、本州島の人物の漂着と帰還などを契機として生じた集団関係から、石狩低地帯と本州島東北部の日本海側のある地域の特定集落や家族のような小規模な集団同士で継続的に物資交換がおこなわれていた

可能性がある。

(13)——弥生文化後期天王山式成立期に本州島東北部で北から南への大規模な人の移住があったとする仮説もあるが〔石井 1997a〕、これが A 地域の崩壊に関係している可能性は時期の違いから考える必要はないであろう。なお、石井は縄文原体の種類の変化を仮説の重要な論拠としているが、筆者には天王山式期とそれ以前までの土器では原体の装飾効果が大きく異なっている点に配慮する必要があると思われる。LR から RL へというように、純粋に撚りの方向が短期間で広い空間範囲で変わっていれば質的属性の変化といえるであろうが、このケースでは RL を中心とする 2 段の縄の回転縄文が、装飾効果が

まったく異なる絡条体もしくは附加条に変化する。しかも、もともと RL が卓越している地域で L の絡条体に変化することが多いため、これを左右性の変化ととらえることが可能かどうかはさらに吟味が必要と考える。

(14)——この間に、異なる考古学的文化の担い手のあいだで婚姻や文化的影響関係がまったくなかったとはいえない。ただし、婚姻があった場合は、婚姻先の文化への「同化」が積極的に行われていたのであろう。文化的な影響関係があった場合でも、その範囲はきわめて限られており、中間的な物質文化やこの地域固有の文化を形成するまではいたらないのが特徴である。

引用文献

- 青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会。
- 青野友哉 1999a「大洞～恵山式土器の墓と副葬品—研究成果と今後の課題—」『海峡と北の考古学—文化の接点を探る—』日本考古学協会 1999 年釧路大会実行委員会。
- 青野友哉 1999b「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた続縄文文化の特質」『北海道考古学』35, pp.69-82。
- 青野友哉 2005「小牧野遺跡出土の続縄文土器について」『葛西励先生退官記念論文集 北奥の考古学』, pp.455-462。
- 秋山洋司編 1998『H37 遺跡（栄町地点）』札幌市教育委員会。
- 尼岡邦夫・仲谷一宏・矢部 衛 2011『北海道の全魚類図鑑』北海道新聞社。
- 阿部常樹 2011「動物遺存体分析」小杉 康・高倉 純・守谷豊人ほか『K 39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』, pp.272-277, 北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 安藤広道 2006「先史時代の植物遺体・土器圧痕の分析をめぐる覚書」『西相模考古』15, pp.111-122。
- 石井 淳 1997a「東北地方天王山式成立期における集団の様相—土器属性の二者—（上）（下）」『古代文化』49-7, 49-9, pp.20-33, pp.15-25。
- 石井 淳 1997b「北日本における後北 C₂-D 式期の集団様相」『物質文化』63, pp.23-35。
- 石井 淳 1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439, pp.15-20。
- 石井 淳・出穂雅実・上野秀一 2004『K514 遺跡』, pp.159-171, 札幌市教育委員会。
- 石川日出志 2008「続縄文文化と弥生文化—鉄器を中心として—」『続縄文文化とは何か』, pp.3-10, 北海道考古学会。
- 石川日出志 2012「弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の遺跡群」『古代学研究所紀要』, pp.15-31。
- 石本省三ほか 2000『国立療養所裏遺跡』七飯町教育委員会。
- 伊東信雄 1967「東北における稲作の起源」（『東北地理学会講演要旨』, 伊東信雄 1973『古代東北発掘』, pp.102-108 に再録）。
- 伊東信雄 1968「東北の稲作起源」（朝日新聞 4 月 19 日, 伊東信雄 1973『古代東北発掘』 pp.123-126 に「東北北部の稲作起源」と改題して再録）。
- 伊東信雄 1970「稲作の北進」『古代の日本 8 東北』角川書店。
- 井上 巖 2003「新金沼遺跡出土土器の胎土分析」芳賀英実ほか 2003『新金沼遺跡—高規格道路「三陸自動車道」建設に伴う発掘調査報告書—』, pp.86-105, 石巻市教育委員会・国土交通省東北地方整備局。
- 井上雅孝 1995「海綿骨針を含む続縄文土器について—胎土から見た後北 C₂-D 式土器の一視点—」『みちのく発掘—菅原文也先生還暦記念論集—』, pp.289-304。
- 今村啓爾・石田 肇・宇田川洋・大貫静夫・熊木俊朗・後藤 直・佐宗亜衣子・佐藤宏之・高橋 健・塚本浩司・新美倫子・埴原恒彦・藤本 強・山田 哲 2001『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設。
- 上田吉幸・前田圭司・嶋田 宏・鷹見達也編 2003『新北のさかなたち』北海道新聞社。
- 上野秀一編 1987『K135 遺跡』札幌市教育委員会。

- 右代啓規 2011「海洋資源の利用と古環境—貝塚からみたエゾアワビの捕獲史から—」『日本列島の三万五千年一人と自然の環境史 第四巻 島と海と森の環境史』, pp.19-33, 文一総合出版。
- 右代啓規・平川善祥・山田悟郎・赤松守雄ほか 2001『貝取澗2 洞窟遺跡』北海道開拓記念館。
- 江坂輝弥 1957「奥羽地方北部の縄文文化の問題」『貝塚』63, pp.1-2。
- 江別市教育委員会 1981『元江別遺跡群』江別市教育委員会。
- 大坂 拓 2009「八幡堂遺跡出土土器の分析」安藤広道編『東日本先史時代土器編年における標識資料・基準資料の基礎的研究』平成18～20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, pp.37-40。
- 大坂 拓 2011「後北式土器拡散開始期における集団移動の様相」『考古学集刊』7, pp.39-61。
- 大島直行 2003『図説有珠モシリ遺跡』伊達市教育委員会。
- 大塚達郎 1996「土器—山内型式論の再検討より—」『考古学雑誌』82-2, pp.11-25。
- 大場利夫 1956「北海道」『日本考古学講座3 縄文文化』, pp.80-124, 河出書房。
- 岡本 勇 1959「土器型式の現象と本質」『考古学手帖』6, pp.1-2。
- 岡本孝之 1991「杉原莊介と山内清男の相剋—または弥生文化と大森(縄文)文化との関係について—」『神奈川考古』27, pp.57-69。
- 岡本孝之 1994「東北大森文化統期序説」『神奈川考古』30, pp.43-56。
- 加藤邦雄 1992「伝統文化と新来の文物」須藤 隆・今泉隆雄・坪井清足編『新版古代の日本』9, pp.427-448, 角川書店。
- 金子浩昌 1987a「K135 遺跡の脊椎動物遺存体」上野秀一編『K135 遺跡』, pp.527-564, 札幌市教育委員会。
- 金子浩昌 1987b「N295 遺跡出土の脊椎動物遺体」羽賀憲二編『N295 遺跡』, pp.111-118, 札幌市教育委員会。
- 金子浩昌 1989「忍路土場遺跡出土の動物遺存体」種市幸生ほか編『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡 第4分冊』, pp.222-287, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 金子浩昌 1996「釧路市幣舞遺跡出土の動物遺体」『釧路市幣舞遺跡調査報告書III』, pp.173-190, 釧路市埋蔵文化財調査センター。
- 金子浩昌 1999「釧路市幣舞遺跡出土の動物遺存体—1997, 1998年度—」『幣舞遺跡調査報告書IV』, pp.133-240, 釧路市埋蔵文化財調査センター。
- 金子浩昌 2004「西島松5遺跡の出土骨について」佐藤和雄ほか編『恵庭市西島松5遺跡(3)』, pp.442-474, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 金子浩昌 2009「西島松5遺跡出土の動物骨同定」土肥研晶・柳瀬由香編『恵庭市西島松5遺跡(6)』, pp.264-277, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 金子浩昌・土肥研晶 2003「奥尻町青苗砂丘遺跡の動物遺体」『奥尻町青苗砂丘遺跡2』, pp.59-73, 北海道立埋蔵文化財センター。
- 金子浩昌・土肥研晶 2004「動物遺体の調査」『恵山貝塚』, pp.61-75, 北海道立埋蔵文化財センター。
- 金子浩昌・土肥研晶 2005「恵山貝塚の動物遺体」『恵山貝塚II』, pp.77-111, 北海道立埋蔵文化財センター。
- 木村 高・鈴木 信 2011「古墳時代並行期の北方文化」『古墳時代(上)』, pp.710-758, 青木書店。
- 木村英明 1976「縄文文化の生産用具一定型的な刃器出現の意味するもの」『どるめん』10, pp.17-32。
- 工藤雅樹 1989『城柵と蝦夷』ニュー・サイエンス社。
- 熊木俊朗 2001「後北C2・D式土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』, pp.176-217, 東京大学大学院人文社会科学系研究科。
- 小杉 康 2011a「空間を読む」『はじめて学ぶ考古学』, pp.76-99, 有斐閣。
- 小杉 康 2011b「列島北東部の考古学」『はじめて学ぶ考古学』, pp.263-282, 有斐閣。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・小野哲也 2004『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書』I(遺物・遺構編), 北海道大学。
- 小林達雄 1977「型式, 様式, 形式」『日本原始美術体系』1(縄文土器), pp.166-169。
- 小林達雄 1989「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観』4, pp.248-257。
- 齋藤瑞穂・福田正宏 2003「縄文/弥生移行期の下北半島についての一考察—一般調査の成果にもとづいて—」『北方探求』5, pp.26-49。
- 桜井はるえ 2009「剣吉荒町遺跡出土の類遠賀川系土器について」安藤広道編『東日本先史時代土器編年における標識資料・基準資料の基礎的研究』平成18～20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, pp.127-138。
- 佐藤由紀男 2006「紀元前, 灌漑型水稲農耕はなぜ津軽平野まで波及しなかったのか」『考古学の諸相II』, pp.999-

- 1020。
- 佐原 真 1992 『体系日本の歴史1 日本人の誕生』小学館。
- 沢 四郎 1974 「縄文文化から続縄文文化へ」『新釧路市史』1。
- 鈴木 信 1994 「威信経済としてのメカジキ漁—階層化社会のモデルについての再検討—」『考古学と信仰』, pp.333-347, 同志社大学。
- 鈴木 信 2009a 「続縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』152, pp.401-440。
- 鈴木 信 2009b 「続縄文文化と弥生文化」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』, pp.129-147, 同成社。
- 鈴木 信 2010 「続縄文期における階層差とは—墓制・交易からの検討—」『北海道考古学』46, pp.23-42。
- 鈴木 信 2011 「動物遺存体」『釧路町天寧1 遺跡(2)』, pp.424-427, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂。
- 須藤 隆・高橋 哲 1997 「山王遺跡出土石器の使用痕分析」『山王遺跡』, pp.151-173, 多賀城市教育委員会・建設省東北建設局。
- 瀬川拓郎 1983 「縄文後期～続縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』19, pp.37-49。
- 瀬川拓郎 2005 『アイヌエコシステムの考古学』北海道出版企画センター。
- 瀬川拓郎 2011 『アイヌの世界』講談社。
- 高倉 純 2011 「石器からみた縄文から続縄文時代への変容—両面調整石器製作工程の検討を中心に—」『北海道考古学』47, pp.17-32。
- 高瀬克範 1996 「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60, pp.60-70。
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34, pp.21-41。
- 高瀬克範 2002a 「黒曜石製石器の使用痕分析」高木晃編『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』, 349-365頁, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高瀬克範 2002b 「東北日本における弥生・続縄文の生業」, 『東京大学文学部公開セミナー東アジアの生業形態II』, ページなし, 東京大学文学部。
- 高瀬克範 2004 『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房。
- 高瀬克範 2005 「恵山式成立前後の型式細分と系統関係」『科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書』(代表:石川日出志), pp.63-72。
- 高瀬克範 2007a 「本州島東北部における縄文・弥生期の出土種子」『日本考古学協会2007年度大会研究発表資料集』, pp.398-408。
- 高瀬克範 2007b 「日本2 東北地方」『日本考古学協会2007年度熊本大会 II分科会 列島初期農耕史の新視点種子出土遺跡地名表』, pp.1-28(青森県), pp.1-8(岩手県), pp.1-4(秋田県), pp.1-6(宮城県), pp.1-4(山形県), pp.1-7(福島県)。
- 高瀬克範 2008 「搔器にみる時空間連鎖—古墳時代の事例—」『考古学ジャーナル』575, pp.28-31。
- 高瀬克範 2009 「『変動期東北部』の歴史世界」『東北学』19, pp.50-60。
- 高瀬克範 2010a 「続縄文文化と縄文文化」小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学1 比較文化論による相対化』, pp.167-177, 同成社。
- 高瀬克範 2010b 「レプリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究—青森県域出土土器を対象として—」『日本古代学研究所紀要』13, pp.3-22。
- 高瀬克範 2010c 「レプリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究—秋田県域出土土器を対象として—」『貝塚』66, pp.1-18。
- 高瀬克範 2011a 「K39 遺跡北海道大学工学部共用実験研究棟地点出土黒曜石製石器の使用痕分析」『K39 遺跡北海道大学工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』, pp.299-311, 北海道大学。
- 高瀬克範 2011b 「東北部の農耕文化をどうとらえるか」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学3 多様化する弥生文化』, pp.114-128, 同成社。
- 高瀬克範 2011c 「レプリカ法による縄文晩期から弥生・続縄文の土器圧痕の検討—北海道・宮城県域における事例研究—」『北海道考古学』47, pp.33-50。
- 高瀬克範 2011d 「下北半島初期農耕社会における環境・資源利用に関する考古学的研究」『明治大学人文科学研究所紀要』68, pp.41-73。
- 高瀬克範 2012a 「弥生時代における地域構成体論の構築」『明治大学人文科学研究所紀要』70, pp.63-89, 明治大学

- 人文科学研究所。
- 高瀬克範 2012b 「男鹿半島・八郎潟周辺における縄文時代晩期および弥生時代の占地特性」『古代学研究所紀要』17, pp.43-57。
- 高瀬克範編 2012 『江豚沢 I』江豚沢遺跡調査グループ。
- 高瀬克範・丸山浩治 2003 「中半入遺跡における古墳時代の黒曜石製石器—1D区「105号住居跡」出土資料の検討—」『古代』113, pp.165-183。
- 高橋 哲 1998 「木戸脇裏遺跡出土の北海道系石器の研究」『考古学の方法』2, pp.19-21。
- 高橋 哲 2005 「続縄文文化後半期の石器研究」『北海道考古学』41, pp.21-38。
- 高橋 理 1993 「恵庭市ユカンボシ E9 遺跡出土動物遺存体」『ユカンボシ E9 遺跡 ユカンボシ E3 遺跡』, pp.127-130, 恵庭市教育委員会。
- 高橋 理 1995 「美沢 15 遺跡出土の動物遺存体」『ペンケナイ川流域の遺跡群 III 美沢 15 遺跡』, pp.271-276, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 1999a 「千歳市キウス 4 遺跡 A・H・K 地区出土動物遺存体」『千歳市キウス 4 遺跡 (3)』, pp.505-513, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 1999b 「千歳市キウス 4 遺跡 A2 地区出土動物遺存体」『千歳市キウス 4 遺跡 (4)』, pp.205-210, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 2000 「えりも町油駒遺跡出土動物遺存体」赤石慎三・中岡利泰編『油駒遺跡』, pp.77-87, えりも町教育委員会。
- 高橋 理 2001 「千歳市キウス 4 遺跡 Q 地区出土動物遺存体」『千歳市キウス 4 遺跡 (7)』, pp.353-358, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 2002 「千歳市チブニー 1 遺跡, チブニー 2 遺跡出土動物遺存体」『千歳市チブニー 1 遺跡, チブニー 2 遺跡』, pp.171-174, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 2003 「千歳市ユカンボシ C15 遺跡出土動物」『千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (6)』, pp.297-308, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理 2004 「恵庭市カリンバ 3 遺跡出土動物遺存体」『恵庭市カリンバ 3 遺跡 (3)』, pp.174-189, 恵庭市教育委員会。
- 高橋 理・太子夕佳 1998 「千歳市キウス 5 遺跡 A-2 地区出土動物遺存体」『キウス 5 遺跡 (5)』, pp.341-343, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理・太子夕佳 2001 「千歳市キウス 4 遺跡 D・F・G 地区出土動物遺存体」『キウス 4 遺跡 (8)』, pp.481-501, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理・山崎京美 2002a 「八雲町栄浜 1 遺跡出土動物遺存体」熊谷仁志ほか編『八雲町栄浜 1 遺跡』, pp.223-224, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理・山崎京美 2002b 「恵庭市西島松 5 遺跡出土動物遺存体」新家水奈・佐藤 剛編『恵庭市西島松 9 遺跡』, pp.61-63, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 高橋 理・山崎京美・太子夕佳 2003 「キウス 4 遺跡 R 地区出土動物遺存体」『キウス 4 遺跡 (9)』, pp.161-192, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 武田 修編 1995 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会。
- 田村 隆 2012 「ゴミ問題の発生」『物質文化』92, pp.1-37。
- チャイルド, V.G. 1956 (近藤義郎訳 1964) 『考古学の方法』(新装版 1994) 河出書房新社 (V. G. Childe 1956 *Piecing Together the Past*, Routledge and Kegan Paul Ltd)
- 土田亜佐子・上野秀一 1976 「器種セットについて」『瀬棚南川遺跡』, pp.165-172, 瀬棚町教育委員会。
- 土肥研晶 2010 「柏木川 4 遺跡出土の動物遺存体」谷島由貴・佐藤 剛編『柏木川 4 遺跡 (4)』, pp.192-194, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 富岡直人 1995 「H317 遺跡出土動物遺存体および鹿角製尖頭器について」仙庭伸久編『H317 遺跡』, pp.215-237, 札幌市教育委員会。
- 富岡直人 1996 「H37 遺跡出土動物遺存体」羽賀憲二『H37 遺跡 丘珠空港内』, pp.110-123, 札幌市教育委員会。
- 富岡直人 1997 「K36 遺跡タカノ地点出土動物遺存体」秋山洋司編『K36 遺跡タカノ地点』, pp.69-73, 札幌市教育委員会。
- 富岡直人 1998a 「札幌市 N30 遺跡から出土した動物遺存体」上野秀一編『N30 遺跡』, pp.186-205, 札幌市教育委員会。

- 富岡直人 1998b 「H37 遺跡栄町地点出土動物遺存体」秋山洋司編『H37 遺跡（栄町地点）』、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2000 「K435 遺跡出土動物遺存体およびカルシウム塊と発泡物質の分析」仙庭伸久編『K435 遺跡第2次調査』、pp.93-113、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2001 「札幌市 K39 遺跡第6次調査地点出土動物遺存体」藤井誠二編『K39 遺跡第6次調査 第5分冊』、pp.38-81、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2002a 「K39 遺跡第9次調査出土動物遺体の分析」石井 淳・出穂雅実・上野秀一編『K39 遺跡第9次調査』、pp.73-83、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2002b 「K440 遺跡出土動物遺存体の分析」『K440 遺跡』、pp.124-130、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2003 「C424 遺跡 A, B 地点・C507 遺跡における動物遺存体の分析」柏木大延ほか編『C424 遺跡 C507 遺跡』、pp.415-442、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2004a 「K514 遺跡出土の動物遺存体」石井 淳・出穂雅実・上野秀一『K514 遺跡』、pp.159-171、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2004b 「動物遺存体」出穂雅実・上野秀一・仙庭伸久・羽賀憲二『N 30 遺跡 第2次調査』、pp.153-175、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2004c 「K515 遺跡出土動物遺存体」出穂雅実編『K515 遺跡』、pp.64-72、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2004d 「K445 遺跡における動物遺存体の分析」柏木大延・出穂雅実・上野秀一編『K445 遺跡』、pp.103-108、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2005a 「C504 遺跡における動物遺存体の分析」柏木大延・羽賀憲二編『C504 遺跡』、pp.140-146、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2005b 「M459 遺跡における動物遺存体の分析」柏木大延・出穂雅実編『M459 遺跡』、pp.176-179、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2006a 「札幌市 C43 遺跡出土動物遺存体の分析」『C43 遺跡』、pp.55-57、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2006b 「K523 遺跡出土の動物遺存体」小針大志・秋山洋司編『K523 遺跡』、pp.103-115、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2007a 「札幌市 K518 遺跡第1次調査出土動物遺存体の分析」『K518 遺跡 第1次調査』、pp.140-146、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2007b 「札幌市 H519 遺跡出土動物遺存体の分析」石井 淳編『H519 遺跡 第2分冊』、pp.1-20、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2007c 「札幌市 C522 遺跡出土動物遺体の分析」出穂雅実編『C522 遺跡』、pp.65-68、札幌市教育委員会。
- 富岡直人 2008 「札幌市 K528 遺跡から出土した動物遺存体について」野月寿彦・石井 淳編『K528 遺跡 第2分冊』、pp.1-18、札幌市教育委員会。
- 富岡直人・鈴木宏行・沖田絵麻・立石和也 2011 「天寧1 遺跡出土動物遺存体の分析」『釧路町天寧1 遺跡(2)』、pp.173-288、財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 新美倫子 2008 「天寧1 遺跡出土の魚類」工藤研治ほか編『釧路町天寧1 遺跡』、pp.241-245、財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 西本豊弘 1978 「動物遺存体」上野秀一・羽賀憲二ほか編『白老町虎杖浜2 遺跡—1977 年度試掘調査報告書—』、pp.30-32、白老町教育委員会。
- 西本豊弘 1979 「動物遺存体」田口崇編『稲倉石岩陰遺跡』、pp.43-48、厚沢部町教育委員会。
- 西本豊弘 1980 「美沢4 遺跡出土動物遺存体」『フレベツ遺跡群—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』、pp.59-69、財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 西本豊弘 1981 「須藤遺跡出土の動物遺存体」『斜里町文化財調査報告 I』、pp.173-176、斜里町教育委員会。
- 西本豊弘 1983a 「動物遺存体」『南有珠6 遺跡』、pp.40-48、札幌医科大学解剖学第二講座。
- 西本豊弘 1983b 「南川遺跡発見の動物遺存体」加藤邦雄ほか編『瀬棚南川』、pp.165-169、瀬棚町教育委員会。
- 西本豊弘 1984 「恵山貝塚出土の骨角器と動物遺存体」小笠原忠久編『恵山貝塚—続縄文時代の墳墓群の調査—』、pp.40-43、尻岸内町教育委員会。
- 西本豊弘 1987 「高砂貝塚出土の動物遺体」大島直行・百々幸雄ほか編『高砂貝塚』、pp.159-166、札幌医科大学解剖学第二講座。
- 西本豊弘 1988 「谷田遺跡出土動物遺存体」金盛典夫・松田功ほか『谷田遺跡発掘調査報告書』、pp.175-176、斜里町教育委員会。
- 西本豊弘 1994 「穂香堅穴群出土の動物遺体」『穂香堅穴群発掘調査報告書』、pp.38-40、根室市教育委員会。

-
- 西本豊弘 1999「伊達市北黄金貝塚出土の動物遺体」青野友哉編『国指定史跡北黄金貝塚発掘調査報告書—水場遺構の調査2—』, pp.38-40, 伊達市教育委員会。
- 西本豊弘 2008「天寧1遺跡出土の爬虫類・鳥類・哺乳類」工藤研治ほか編『釧路町天寧1遺跡』, pp.246-260, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 西本豊弘・新美倫子 1992「コタン温泉遺跡出土の動物遺体」三浦孝一・柴田信一編『コタン温泉—縄文時代集落と貝塚の調査—』, pp.433-468, 八雲町教育委員会。
- 西本豊弘・新美倫子 1993「動物遺体」『戸井貝塚III—縄文時代後期初頭貝塚の発掘調査報告—』, pp.146-174, 戸井町教育委員会。
- 西本豊弘・新美倫子 1999「石倉貝塚出土の動物遺体」田原良信ほか編『石倉貝塚』, pp.394-414, 函館市教育委員会。
- 西本豊弘・新美倫子・小林園子・佐藤孝雄・樋泉岳二 2000「動物遺体」西本豊弘編『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書—平成10年度発掘調査の報告—』, pp.304-313, 礼文町教育委員会。
- 西本豊弘・増川栄一 1983「ママチ遺跡出土の動物遺存体」種市幸生編『ママチ遺跡』, pp.307-309, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 西脇対名夫 2010「北海道の考古学と時代区分」松藤和人・門田誠一編『よくわかる考古学』, pp.182-185, ミネルヴァ書房。
- 野島 永 2009「鉄器の生産と流通」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学6』, pp.43-52, 同成社。
- 羽賀憲二編 1996『H37遺跡 丘珠空港内』札幌市教育委員会。
- 芳賀英実・阿部 篤・古澤亜希子・今野勝成 2003『新金沼遺跡—高規格道路「三陸自動車道」建設に伴う発掘調査報告書—』石巻市教育委員会・国土交通省東北地方整備局。
- 橋本達也 2012「古墳築造周縁域における境界形成—南限社会と国家形成—」『考古学研究』58-4, pp.17-31。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003「西島松5遺跡の自然科学的分析」佐藤和雄ほか編『恵庭市西島松5遺跡(2)』, pp.361-375, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2005「生測2遺跡炭化種子・炭化樹種・動物遺存体同定」遠藤香澄・芝田直人編『生測2遺跡』, pp.96-102, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2006「対雁2遺跡の自然科学的分析」『対雁2遺跡(8)』, pp.174-213, 北海道埋蔵文化財センター。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2007「対雁2遺跡屋外炉の自然科学的分析」芝田直人・酒井秀治編『対雁2遺跡(9)』, pp.133-145, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 林 謙作 2004「第4章 縄文土器の型式」『縄文時代史I』pp.77-124, 雄山閣。
- 福井淳一 2008「天寧1遺跡出土の無脊椎動物」工藤研治ほか編『釧路町天寧1遺跡』, pp.233-245, 財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 藤尾慎一郎 2011『<新>弥生時代—五〇〇年早かった水田稲作—』吉川弘文館。
- 藤本 強 1979『北辺の遺跡』教育社。
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会。
- 藤本 強 2009『日本列島の三つの文化—北の文化・中の文化・南の文化—』同成社。
- 北大解剖学教室調査団 1963「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』18, pp.179-287。
- 本間元樹 1995「続縄文文化の鉄器」『北海道考古学』31, pp.187-204。
- 前山精明 1999『南赤坂遺跡発掘調査報告書』巻町教育委員会。
- 松田 功編 1995『オシヤマツ川遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会。
- 松田宏介 2005「集落遺跡の欠如をどのように考えるか—続縄文後半期とイングランド南西部における青銅器時代前期の比較考古学的検討(素描)—」『北大史学』45, pp.1-22。
- 松本建速 2013「本州東北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か」『考古学研究』60-1, pp.55-75。
- 御堂島正 1986「黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—」『神奈川考古』22, pp.51-77。
- 御堂島正 1993「岩手県滝沢村仏沢Ⅲ遺跡出土石器の使用痕分析」『大石渡遺跡』, pp.101-104, 滝沢村教育委員会。
- 峰山 巖・大島直行・瀬川拓郎 1984『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告書』伊達市教育委員会。
- 森田知忠 1967「北海道の続縄文文化」『古代文化』19-2, pp.39-50。
- 森町教育委員会 2008『鷲ノ木遺跡』森町教育委員会。
- 八木光則 2010『古代蝦夷社会の成立』同成社。
- 山田 格 1979「竪穴住居址出土の魚骨片について」大島直行編『知内川中流域の縄文時代遺跡—北海道上磯郡知内
-

-
- 町湯の里1遺跡発掘調査報告一], p.113, 知内町教育委員会。
- 山内清男 1939「日本遠古之文化 補註付・新版」『先史考古学論文集』第1冊。
- 山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術 1』, pp.135-147, 講談社。
- 横山英介 1985「北海道の時代区分—とくに続縄文, 擦文時代を中心に—」『考古学研究』32-2, pp.34-45。
- 吉崎昌一 2003「先史時代の雑穀: ヒエとアズキの考古植物学」山口裕文・河瀬眞琴編『雑穀の自然史—その起源と文化を求めて—』, pp.52-70, 北海道大学出版会。
- Bender, B. 1978 Gatherer-hunter to farmer: a social perspective, *World Archaeology*, 10, pp.204-220.
- Bender, B. 1990 The dynamics of nonhierarchical societies, In Upham, S. ed., *The Evolution of Political Systems*, pp.62-86, Cambridge University Press.
- Clarke, D. L. 1968 *Analytical Archaeology*, Methuen.
- Hayden, B. 1990 Nimrods, piscators, pluckers and planters: the emergence of food production, *Journal of Anthropological Archaeology*, 9, pp.31-69.
- Hutchinson, G. E. 1957 Concluding remarks, *Cold Spring Harbour Symposium on Quantitative Biology*, 22, pp.415-427.
- Peterson, J. T. 1978 Hunter-gatherer/famer exchange, *American Anthropologist*, 80-2, pp.335-351.
- Saraydar, S. and Shimada, I. 1971 A quantitative comparison of efficiency between a atone axe and a steel axe, *American Antiquity*, 36-2, pp.216-217.
- Takase, K. 2011 Plant Seeds Recovered from Potsherds of the Final Jomon and Yayoi Periods: A Case Study in Iwate and Yamagata Prefectures, Northeastern Japan, *Meiji University Ancient Studies of Japan*, 3, pp.41-63.
- Trigger, B. 1989 History of contemporary American archaeology: a critical analysis, In C. C. Lamberg-Karlovsky ed., *Archaeological Thought in America*, pp.14-34, Cambridge University Press.

(北海道大学大学院文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年9月18日審査終了)

Use of Resources and Land in the Epi-Jomon Culture : Perspectives Based on the Comparative Study with Adjacent Cultures

TAKASE Katsunori

Exploring similarities and differences in comparison with adjacent cultures can be a significant approach to assessing the effectiveness of Epi-Jomon concepts. This paper compares them with those of the Jomon and Yayoi cultures as well as part of the Kofun culture from an economic perspective, focusing on the use of resources and land. The result indicates the following:

- 1) The early Epi-Jomon people exploited resources in southern, central, and northern Hokkaido in their respective unique ways though they had something in common in that they all placed more importance to fisheries than the Jomon people had done.
- 2) In central Hokkaido, where more foreign commodities are presumed to have been available from the first half of the Epi-Jomon period, economy centered on this network as well as salmon fisheries may have led to the predominance of this area in the latter half of the period.
- 3) Burned structural remains of the late Epi-Jomon culture include housing facilities. Judging from their simple structure as well as the wide spread of pottery, gradual reduction of stone tools, natural remains mostly accounted for by salmon on a weight basis, and development of ceremonial caves equipped with idols, at least some groups can be assumed to have moved around from one place to another, transporting commodities and resources widely, though it is difficult at present to clarify the frequency of migrations.
- 4) The Yayoi culture in northern Tohoku formed a combined community consisting of two areas: Area A with lowland rice cultivation as its main livelihood activities and Area B with highland hunting and gathering as its primary livelihood strategy. Area B is more likely to have built direct relationships with the Epi-Jomon culture.
- 5) In northern Tohoku in the middle of the Mid-Yayoi period, natural disasters interfered with rice cultivation, leading to the collapse of the community consisting of Area A and B and a sharp drop in the population. This indirectly caused the spread of Epi-Jomon culture in the latter part of the Mid-Yayoi period.
- 6) The northern Tohoku area in the date of Kohoku-C2-D- and Hokudai-type pottery needs to be reanalyzed, not as a cultural boundary (zone) or a cultural transition zone, but as a mixed

residential area, or a mixed residential quarter, of different archaeological cultures.

None of the above features were observed in the Jomon culture. Therefore, at present, it can be considered appropriate to some extent to regard the Epi-Jomon culture as one unique culture.

key word: Epi-Jomon culture, Yayoi culture, Subsistence, Resource use, Exchange